

ナイル諸語における「単数 (Singulative)」について

稗田 乃

1.はじめに

本論文は、ナイル祖語にいわゆる「単数 (Singulative)」形が存在したことを証明し、また、ナイル祖語における「単数 (Singulative)」形の形成法を再構成することを目的としている。

ナイル祖語を再構成する試みは、従来の研究においていまだ十分に成功してはいない。その原因は、従来の研究が形態論を十分に考慮することなく、音韻対応を探し求めたことにある。例えば、Vossen(1982)では、東ナイル祖語の子音体系に*n1、*n2、*n3、というように同じ調音点において、同じ調音法の複数の子音を再構成している。Ehret(2001)は、Vossen(1982)が再構成した、同じ調音点、同じ調音法の複数の子音を、1つの音素の環境で条件付けられる異音であると断言した¹⁾。しかし、実際は、Vossen(1982)が再構成した同じ調音点における、同じ調音法の複数の子音は、彼が異なる範疇の形式を対応させた結果であり、けっして1つの音素の条件異音などではない。例えば、名詞を使った対応において、彼がある言語の単数形に別の言語の「単数 (Singulative)」形を対応させたり、ある言語の複数形に別の言語の異なる形成法によってつくられた複数形を対応させたりしたためである。本論文では、ナイル祖語を再構成する従来の試みが犯した誤りを克服し、ナイル祖語を再構成する出発点を確立することを目的としている。

1.1. ナイル諸語

ナイル諸語は、ナイル・サハラ言語ファイラム (Nilo-Saharan Phylum) を構成する言語および言語グループの中で、話者数、地理的分布、さらに所属する言語の数から考えて、最も重要な言語グループである。ナイル諸語が話されている地域は、東アフリカの南北に広がり、その主要な地域は、北から南部スーダン、エチオピア、ウガンダ、ケニア、北部タンザニアで

1) Ehret(2001), p.18. しかし、Ehret はどこにもその説明を与えていない。

あり、また、コンゴの一部でもナイル諸語は、話されている。ナイル諸語は、西方言と東方言と南方言の3つの下位言語グループに分類される(図1)。東方言と南方言は、近い系統関係をもち、1つの言語グループを構成すると考えられるが、それについては本論文では議論しない。また、西、東、南の各方言グループ内部における下位分類についても議論しない。また、図1は、本論文の議論において用いた言語の名前をただ列挙しただけのものであり、ナイル諸語に所属する言語を網羅したものではない。

図1 ナイル諸語

西ナイル方言 WN

ヌエル語 Nu、ディンカ語 Di、シルク語 Sh、アニューワ語 An、パリ語 Pa、ルオ語 Lu、アチョリ語 Ac、ランゴ語 La

東ナイル方言 EN

バリ語 Ba (モンダリ方言 Mo、ニエプ方言 Ne、パジュール方言 Paj、クク方言 Kuk、カクワ方言 Kak、ニヤングバラ方言 Ny)、テソ語 Te、トゥルカナ語 Tu、カリモジョン語 Km、ロツホ語 Lt (ドンゴトノ方言 Do、ロコヤ方言 Lk、ロピット方言 Lp)、マサイ語 Ma、サンプル語 Sa、オンガモ語 On、ジャムス語 Ca

南ナイル方言 SN

ナンディ語 Na、キプシギス語 Ki、コニィ語 Ko、アギエ語 Ak、ポコト語 Po、ダトーガ語 Da (バジュータ方言 Baj、ギサミジェンガ方言 Gis、ロツティゲンガ方言 Ro、ビアンジータ方言 Bia)

図1での言語の配列にはなんら著者の意図が存在するものではない。以下の対応表では略号を用いる。

1.2. 「単数 (Singulative)」形とは何か

言語形式が実在の数に言及するとき、単数を表示する形式が、複数など、単数以外の数を表示する形式よりも、形態論的に単純で無標であることが一般的である。しかし、言語によっては、単数の実在を言及するために、複数の実在に言及する形式より形態論的に複雑な形式を用いる場合がある。例えば、ルオ語に(1)の例がある。

(1)の例において「鳥」を意味する名詞は、一見すると、単数形が複数形に接尾辞-O/o が接辞された形式になっている。この名詞の場合、明らかに単数形が複数形よりも形態論的に複雑で、有標であるといえる。し

かし、「ビール」を意味する名詞の場合、単数形は、確かに、接尾辞・O/o を接辞した形式になっているが、語幹内部の母音について、複数形がわたり音を伴う2重母音をもつものに対して、単数形は、単純な母音をもっている。したがって、語幹母音の点からは、「ビール」を意味する名詞の場合、単数形と複数形のどちらが形態論的に単純であるか、あるいは、無標であるかを決定するのは簡単ではない。

(1) Lu	sg.	pl.	
	wl.ny-O	wl.ny	'bird'
	kO.ng'-O	kwO.ng'	'beer'
	ri.ng'-o	ri.ng' / ring'ge	'meat'
	u.n-o	u.n / u.nde / unni	'rope' 2)

また、「肉」や「ロープ」を意味する名詞の場合、複数形にいくつかの異形態が存在する。これら異形態の左端にある形式と較べると、単数形は、形態論的に複数形より複雑で有標であると考えられるが、それ以外の異形態と較べると、単数形が複数形より形態論的に複雑で有標であると決して簡単に決定できない。シルク語にもルオ語と同様の例が存在する。

(2) Sh	sg.	pl.	
	dor-o	dor	'wall'
	tyEl-O	tyEl	'foot, leg'
	rej-o	ric	'fish'
	nywog-o	nywok	'louse'
	lEl-O	lEl	'small pebble'

(2)において、「壁」、「あし」を意味する名詞のように、単数形が接尾辞・O/o をもっていて、形態論的に複数形より複雑で有標と簡単に考えられる場合もあるが、「魚」や「しらみ」を意味する名詞のような場合、語幹末の位置にある子音が無声閉鎖音と有声閉鎖音の間で交替していて、単

2)大文字キャピタルで表記した母音は、[-ATR]母音を表記する。ng'は、軟口蓋鼻音を表記し、ng'g は、軟口蓋母音と軟口蓋閉鎖子音の連続を表記する。nd は、歯茎鼻音と歯茎閉鎖子音の連続を表記し、nn は、歯茎鼻音の連続を表記する。また、母音のあとにおかれるピリオドは、先行する母音が若干、長く発音されることを表記している。

数形と複数形のどちらがより形態論的に単純で無標であるかを簡単に決定できない。

実在に言及するとき、とりあえず、形態論的に複数を無標の形式で表示し、そして、単数を有標の形式で表示する場合、単数を表示する有標の形式を「単数 (Singularive)」形と呼ぶ。しかし、ルオ語やシルク語の例で見たように、形態論的に無標か、有標かを決定するのはそう簡単ではない。そこで、派生という観点から「単数 (Singularive)」形を定義する。単数形が複数形など、他の形式から派生されるとき、その形式を「単数 (Singularive)」と呼ぶ。次章でナイル諸語における「単数 (Singularive)」の派生を考察するが、その前に、「単数 (Singularive)」形をもつ名詞の一般的な意味的特徴を見ておこう。

「単数 (Singularive)」形をもつ名詞が指示する実在は、1) 小さなモノで常に集合して存在する傾向があるモノ、例えば、食料や小石など(例、ルオ語「肉」、「ビール」、シルク語「小石」)、2) 動物、鳥、人間など常に群れで存在する傾向のあるモノ(例、ルオ語「鳥」、シルク語「魚」、「しらみ」)、3) 身体部位の名称など、対で存在するモノ(例、シルク語「足、脚」)である。

これらの実在は、普通、自然界において複数で存在するのが当たり前のモノである。これらの実在を、特に数に言及することなく指示するとき、言語形式は、「単数 (Singularive)」形ではなく、複数形が用いられる。この複数形が言及する数は、「一般数 (General Number)」、あるいは、Transnumeral、Unit Reference と呼ばれる。そして、指示する実在が「一般数 (General Number)」ではなく、特に単数であることに言及して、このようなモノを指示するときに「単数 (Singularive)」形が用いられる。逆に、自然界において単数で存在するのが当たり前のモノを、特に数に言及することなく指示するとき、つまり、「一般数 (General Number)」、Transnumeral、Unit Reference で指示するとき、普通、単数形が用いられる。そして、特に数に言及して、複数のモノを指示するとき、複数形が用いられる。「一般数 (General Number)」を表示するための特別な形式は、普通、存在しない。この関係を図示すると図2になる3)。

図2で言えることは、以下のとおりである。形態論的には、単数形と「単数 (Singularive)」と複数形の3種類の形式が存在する。数の範疇は、単数と「一般数 (General Number)」と複数の3つの範疇が存在する。形

3) ナイル諸語には双数や三数が存在しないので、それらについては、問題としない。

形態論的対立と数の範疇の対立は、3つの項がそれぞれに対立するのではない。形態論的な対立に関しては、1)「単数 (Singularive)」形に対して複数形が対立し、2) 単数形に対して複数形が対立する。数の範疇の対立に関しては、A) 単数に対して、「一般数 (General Number)」と複数が合わさったものが対立し、B) 単数と「一般数 (General Number)」が合わさったものに対して、複数が対立する。そして、1) の形態論的対立と A) の数範疇の対立が、2) の形態論的対立と B) の数範疇の対立が並行する。自然界において複数で存在するのが普通であるモノの場合、数範疇は、A) の対立を示し、形態論的な対立は、1) の対立を示す。また、自然界において単独で存在するのが普通であるモノの場合、数範疇の対立は、B) の対立を示し、形態論的対立は、2) の対立を示す。

図2 数の範疇と、数を表示する形式

自然界において複数で存在するのが普通であるモノ

A) 単数対、「一般数 (General Number)」+複数

1) 単数は、「単数 (Singularive)」形で表示され、「一般数 (General Number)」は、複数形で表示される。複数は、複数形で表示される。

自然界において単数で存在するのが普通であるモノ

B) 単数+「一般数 (General Number)」対、複数

2) 単数と「一般数 (General Number)」は、単数形で表示され、複数は、複数形で表示される。

2. ナイル諸語における「単数 (Singularive)」形

2.1. 西ナイル方言

2.1.1. ルオ語

ルオ語を記述した従来の研究において「単数 (Singularive)」形の存在を指摘したものはない。ただし、Tucker(1994)は、子音と母音からなる接尾辞がルオ語の単数形に見られることを指摘した。彼は、その接尾辞の機能は分からないとしている。

(3)と(4)の例から分かることは、以下のとおりである。1) Tucker(1994)が存在を指摘した接尾辞は、鼻音と母音からなっている。2) 一方、すべての複数形は、ルオ語における規則的な複数形成法にしたがって形成されている。3) Tucker(1994)が指摘した接尾辞が接辞された形式は、たいてい、単数として扱われる。ただし、「南京虫」、「所有物」を意味する名詞には複数形が記録されていない。「ハエ」、「昆虫」を意味する名詞の単数

形は、1匹の個体を、また同時に、複数個からなる同一種の集団を意味し、一方、これらの複数形は、異なる種類の複数の集団を意味する。

(3)	Luo	sg.	pl.	
		kEdh·nO	kEthE	'bile'
		kog·no	ko.ke	'nail, claw'

(4)	Luo	sg.	pl.	
		lwAng'·nI	luang'ge, lueng'ge	'fly'
		cwAr·nI		'bug'
		thIw·nI	thI.pE	'small chain'
		jAm·nI		'cattle as possession'
		kud·ni	ku.te	'insect' 4)

(4)の接尾辞·nI/·niは、形式が複数の接尾辞と同じになっている(例えば、ルオ語の複数形成法において、複数形をつくる接尾辞·nI/·niが存在する。pAlA (sg.), pel·ni (pl.) 'knife')。単数形が同一種の複数個をも意味することと、単数形に見られる接尾辞が複数の接尾辞と同じ形をしていることから、接尾辞·nI/·niが接辞された形式は、複数形が集合名詞として用いられ、単数扱いされたものと考えられる。

Tucker(1994)が指摘した単数形に見られる鼻音と母音からなる2つの接尾辞のうち、·nI/·niは、複数形をつくる接尾辞であると分かったので、·nO/·noがその機能が不明である接尾辞として残る。しかし、接尾辞·nO/·noが「単数(Singulative)」形をつくる接尾辞であると決定するにはまだ早計である。接尾辞·nO/·noを接辞された形式が、それと対をつくる複数形よりも形態論的に複雑であるとは簡単に言えないからである。なぜなら、複数形にも接尾辞が接辞されているので、接尾辞の有無だけでは形態論的な複雑性を決定できない。

しかし、ルオ語には形態論的な複雑性の基準だけで「単数(Singulative)」形とみなされうる形式がわずかだが存在する。(1)の4つの名詞は、接尾辞が接辞されない複数形に対して、接尾辞が接辞された単数形をもつ。これらの名詞は、単純に考えて単数形が複数形より形態論

4) dh, thは、それぞれ有声、無声歯閉鎖音を表記する。接尾辞の母音は、語幹の母音に母音調和をおこなう。語幹の母音が[+ATR]であれば、接尾辞の母音は[+ATR]になる。

的に複雑であると言える。

しかし、実際は、ルオ語は、(1)の「肉」や「ロープ」を意味する名詞の例から推測できるように、あらゆる名詞について、その単数が単数形で表示されるとも、「単数 (Singularive)」形で表示されるとも、単数を表示するどんな形式からも、規則的な複数形成法によって複数形をつくる。これが、ルオ語に生じた複数形成の歴史的改新である。この規則的な複数形成法に例外的な名詞が、(1)の「鳥」と「ビール」を意味する名詞であり、「肉」や「ロープ」を意味する名詞の複数を表示する左端の異形態である。これらの形式は、規則的な複数形成法に従っていない⁵⁾。これらの形式は、ルオ語の複数形成における改新を逃れて、単数形と複数形の対立の古い姿を示している。しかも、これらの名詞の単数を表示する形式は、前章での形態論的な単純性についての議論と意味的特徴を考慮して、「単数 (Singularive)」形であると考えられる。

さらに、ルオ語には単数形と複数形が補充法により区別される名詞が若干、存在する。

(5) Luo	sg.	pl.	
	we.ndo	we.lo	'visitor'
	dA.nA / dA.yO	da.ye	'grandmother'
	dhA.nA	ji	'person'
	dhIAng'	dho.k	'cow, cattle'
	gi(n)	gik	'thing'

5)ルオ語の複数形生について、詳しくはHieda(1991)を参照。語幹と接辞の組み合わせは、論理的には以下の4つの組み合わせが存在すると考えられる。

	sg.	pl.
1.	stem·suffix	stem (2例のみ)
2.	stem·suffix	stem·suffix
3.	stem	stem·suffix
4.	stem	stem (語幹と接尾辞が融合して、接尾辞を容易に分離できない)

1のタイプは、(1)の2つの名詞しかない。4のタイプは、(5)の例である。単数形と複数形の組み合わせは、たいてい、2か3のパターンのどれかを示す。語幹と接尾辞の組み合わせがこのパターンを示すのは、ルオ語が、どんな単数形であろうとも、もともとは「単数 (Singularive)」形であろうとも、単数を表示する形式に接尾辞を付加することにより複数形をつくるという、複数形成の歴史的発展を遂げた結果である。

数に言及することなく、「牛」を表現するときは、普通、「牛」を意味する名詞の複数形が用いられる。とりわけ、「牛」1頭を指示したい場合には、「牛」を意味する名詞の単数形を用いる。同様に、「人」を数に言及することなく表現するとき、すなわち、「一般数 (General Number)」を表現するには、「人」を意味する名詞の複数形が用いられる。このことから (5) の左側にある形式は、「単数 (Singularive)」形であると考えられる。

これまでの議論をまとめると、次のようになる。ルオ語には「単数 (Singularive)」形が存在していた。「単数 (Singularive)」形をつくる形成法は、2つ、存在していた。1つは、接尾辞・nO/-no を名詞語幹に接辞するやり方と、もう1つは、現在では補充法になってしまっている形成法であった。しかし、ルオ語は、複数形成の歴史的改新を行ったため、「単数 (Singularive)」形は、痕跡として残っているだけである。

ルオ語は、複数形成の歴史的改新を行ったため、現在のルオ語からは古い「単数 (Singularive)」の形式を探るのは容易ではない。補充法による数の区別とともに、次節でシルク語の例を使って、考察するのが良いであろう。

2.1.2.シルク語

シルク語を記述した従来の研究において、シルク語に「単数 (Singularive)」形の存在を指摘したものはない。Kohnen(1933)は、単数形が母音・o で終わる名詞は、その母音を落とすことで、複数形が形成されると述べている。

(6)	Sh	sg.	pl.	
	doro		dor	'wall'
	tyElo		tyEl	'foot, leg'
	rejo		ric	'fish'
	ng'uro		ng'urr	'gad-fly'
	nywogo		nywok	'louse'
	lElo		lEl	'small pebble'

(6) の例は、Kohnen(1933)が述べる語末の位置の母音を脱落することで形成された複数形である。これらの例は、前章で議論した形態論の複雑性の定義によると、単数を表現する形式が有標である。また、これらの名

詞は、前章で議論した「単数 (Singularive)」形をもつ名詞の意味的特徴を備えている。これらのことから、(6) において左側に位置する形式は、「単数 (Singularive)」形で、右側にある形式は、「一般数 (General Number)」を表示する形式であると考えられる。(6) の例、つまり、単数を表示する形式が接尾辞をもち、複数を表示する形式が接尾辞をもたない名詞は、ルオ語ではほんのわずかしが存在しないが、シルク語においてはかなりの数が存在する。

さらに、シルク語には、母音・o が単数形に接辞する名詞以外に、母音・i が単数形に接辞する名詞がわずかに存在する。

(7) Sh	sg.		pl.	
		deted·i	detet	'long pole for pushing boats'
		dekag·i	dekakki	'stick for digging the ground'

シルク語においては、母音・i が接辞される複数形が、規則的な名詞複数形成法によって派生される (Hieda, 1991)。単数形に接辞されている母音・i は、複数形に接辞されている母音・i と同じ形をしており、したがって、母音・i が接辞されて形成された単数を表示する形式は、複数形が集合名詞的に単数として用いられたものと考えられる。

また、シルク語には、母音・o が単数形に接辞されるだけにとどまらず、単数形の語幹末の位置で子音が鼻音化する名詞が存在する。

(8) Sh	sg.		pl.	
		kwanyo	kwac	'fish-scale'
		wanyo	wac	'paper, book'
		punyo	puc	'string of a musical instrument'
		yung'o	yuk	'fire-wood'
		keny	kaj / kej	'place, spot'
		(o)yino	yith	'fisherman'
		bun / budo	budi	'parcel, part'
		dhano	ji	'man, human being'
		dhyang'	dhok	'cow'
		gin	gik	'thing'

「薪」を意味する名詞は、普通、常に複数形で用いられる。特に単数形

で用いられるとき、それは、「木材の一片」を意味することから、「薪」を意味する名詞の単数を表示する形式は、「単数 (Singulative)」形と考えられる。(8) の例、つまり、単数形が接尾辞-o をもち、さらに、単数形で語幹末の位置の子音が鼻音化を受ける名詞は、単数を表示する形式が「単数(Singulative)」形であると考えられる。

シルク語「単数 (Singulative)」形の語幹末の位置における鼻音化は、ヌエル語の複数形成において見られる鼻音化ときわめて似ている。

(9) Nu sg. pl.
 gwak' gwageni / gwang'eni 'fox'
 jith kejiēhi 'ear'6)

(9) の「きつね」を意味する名詞は、複数形に2つの異形態をもっている。一方は、語幹末の位置で子音の鼻音化を受けず、有声化を受ける形式であり、他方は、語幹末の位置で子音の鼻音化を受ける形式である。「耳」を意味する名詞は、複数形の語幹末の位置で子音が鼻音化を受けた形式をもつ。これらの複数形の形成法は、以下のとおりである。

(10) Nu gwak' sg.
 IR4 gwak' + eni
 R2 gwag + eni pl. R2' gwang' + eni pl.
 jith sg.
 IR4 jith + ni
 R2' jinh + ni
 N-drop jienh + i pl.

IR4 は、名詞の複数形成において、語幹に複数をつくる接尾辞-eni、あるいは、-ni が接辞する規則である。語幹末の位置の子音が無声閉鎖子音(ヌエル語では声門閉鎖をともなう閉鎖音で表記される)であれば、接尾

6)k'は、声門閉鎖をともなう閉鎖子音を表記する。ヌエル語において声門閉鎖をともなう閉鎖子音は、無声閉鎖子音に由来すると考えられる。有声閉鎖子音から由来する閉鎖子音は、声門閉鎖をともなわない閉鎖子音で表記される。ただし、声門閉鎖をともなう閉鎖子音は、かならずしも、体系的に記述されていない。nh は、齒鼻音を表記する。

辞・eni が接辞され、語幹末の位置の子音が有声閉鎖子音（ヌエル語では声門閉鎖をともしない閉鎖音で表記する）であれば、接辞・ni が接辞される。R2 は、語幹末の子音を有声化する規則である。R2' は、語幹末の子音を鼻音化する規則である。R2 が適用されるか、R2' が適用されるかで、異形態が生じるのである。N-drop は、鼻音が連続すると、2 番目の鼻音が脱落する規則である 7)。

シルク語の単数形において語幹末の位置で子音の鼻音化がみられる形式の形成法は、ヌエル語の複数形成における鼻音化規則とよく似た規則で説明することができる。シルク語の語幹末の位置で子音の鼻音化を伴う「単数 (Singularive)」形と、ヌエル語の語幹末の位置で子音の鼻音化を伴う複数との違いは、母音の質の違いである。シルク語の語幹末の位置で子音の鼻音化を伴う「単数 (Singularive)」形の形成を、ヌエル語の複数形成の規則にならって、説明すると以下のようなになる。

(11) Sh *kwaj

SR kwaj + no

R2' kwany + no

N-drop kwany + o singularive

SR は、語幹に「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞を付加する規則である 8)。R2' は、語幹末の位置の子音を鼻音化する規則である。恐らく、閉鎖子音が後続する鼻音に同化して、鼻音になる規則であったろう。N-drop は、2 つの鼻音が連続するとき、2 番目の鼻音が脱落する規則である。SR と R2' と N-drop の規則を適用すると (8) のシルク語における語幹末の位置で子音が鼻音化する「単数 (Singularive)」形を、すべて、形成することができる。ただし、(8) のなかで、「人」、「牛」、「物」を意味する名詞の単数を表示する形式は、語幹末の位置における子音の鼻音化では単純に説明することはできない。これらは、補充法による単数と複数の区別とされてきたものである。これらについては第 3 章で詳しく議論する。

2.1.3. アニューワ語

7) 複数形成については、詳しくは、Hieda(1991)を参照。

8) 「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞の母音は、[-ATR]母音・O であろう。だが、シルク語の母音の質を記述した信頼できる資料がない。Kohnen の記述に従っておく。

アニューワ語の記述の中で、Reh(1996)は、「単数 (Singulative)」形をつくる接尾辞・O (中声調をもつ) の存在を指摘している (12)。Reh(1996)は、語幹末の位置における子音の鼻音化を伴う単数形の存在についても指摘している(13)。

- (12) An sg. pl.
 /wEnyO/ /wEng'/ 'small bird'
 /tOng'O/ /tOng'/ 'egg'
 /bElO/ /bEl/ 'charcoal'

- (13) An sg. pl.
 rEnnhO rIlth 'fin'
 kunnho koodhi 'seed'9)

- (14) An sg. pl.
 larro laar 'vein'

Reh(1996)は、(13) の語幹末の位置に子音の鼻音化を伴う単数形の派生を以下のように考えている。また、(14) の語幹末の位置で流音が重複する単数形も子音の鼻音化と同様に説明できると考えている。

- (15) /rEnnhO/ < /rIIdh/ + /·VN·/ + /·O/
 /larro/ < /laar/ + /·VN·/ + /·O/

Reh(1996)は、母音と鼻音からなる接尾辞を想定し、その鼻音と先行する子音が鼻音の連続をつくると考えている。また、その鼻音は、先行する流音と流音の重複をつくると考えている。また、彼女は、その接尾辞を・VN と・O の2つの接尾辞と、あるいは、・VNO のように1つの接尾辞と想定することも可能であると考えている。

Reh(1996)が考えた単数形の派生は、本論文、(11) で議論したシルク語の SR、R2'、N-drop の規則と似ている。Reh(1996)は、アニューワ語の「単数 (Singulative)」形をつくる接尾辞が、母音・O に中声調をもち、単数の語末の位置にあらわれる母音・O が、たんに低声調をもつと考えて、

9)nnh は、齒鼻音の連続を表記する。アニューワ語は、齒茎鼻音と齒鼻音の対立がある。

声調によって、「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞を、単数形の語末の位置に現れる母音と区別している。シルク語では、声調を記述した信頼できる資料が存在しないため、Reh(1996)が行ったような声調による区別ができない。したがって、(6) のなかには、「単数 (Singularive)」形ではなく、たんなる単数形が含まれている可能性を排除できない。

Reh(1996)が指摘していない単数形の形成が存在する。(16)の例は、Reh(1996)を含む従来の研究では、補充法による単数形と複数形の区別とされてきたものである。これらの形成法については第3章で議論する。

(16)	An	sg.	pl.	
	dhI	Ang'	dhok	'cow'
	dhA	AnO	jEy	'person'
	gIn		gII	'thing'

2.1.4. 西ナイル祖語

これまでの議論から西ナイル祖語に「単数 (Singularive)」形が存在したことは明らかである。その形成法には、2つのやり方が存在した。1つは、語幹に接尾辞・O を付加するだけのものであり、もう1つは、語幹に接尾辞・nO を付加し、その接尾辞の鼻音と同化することにより語幹末の位置の閉鎖子音が鼻音化するものであった。接尾辞・O が付加された場合、語幹末の位置で閉鎖子音の鼻音化は生じなかった。暫定的に、ナイル祖語の「単数 (Singularive)」形の形成法をまとめると以下のとおりになる。

(17) Proto-WN

- (a) CVC₁-O (C₁は無声閉鎖音、無声閉鎖音と自然類をつくる子音)
 (b) CVC₁-nO > CVN-nO > CVN-O (C₁は有声閉鎖音、有声閉鎖音と自然類をつくる子音)

接尾辞・nO が付加されるのは、語幹末の位置の閉鎖音が有声の場合であったろう。一方、接尾辞・O が付加されるのは、語幹末の位置の閉鎖音が無声の場合であったろう。これらの接尾辞は、1つの形態素の異形態と考えられる。閉鎖子音以外の子音、例えば、流音や鼻音は、有声閉鎖音と自然類を形成し、接尾辞・nO が付加されるか、あるいは、無声閉鎖音と自然類を形成し、接尾辞・O が付加された。流音や鼻音が有声閉鎖音と自然類を形成するか、あるいは、無声閉鎖音と自然類を形成するかは、西ナイル

祖語の時代に既に地理的変異が存在したと考えられる。しかし、これについては、さらに検討が必要である。

2.2. 東ナイル諸語、マサイ語

従来のマサイ語の記述には、マサイ語に「単数 (Singularive)」形の存在を指摘したものはない。ただし、Tucker&Mpaayei(1955)は、単数形が複数形から接尾辞を付加することで派生する可能性があるとして述べている。その接尾辞には、-i、-a、-o、-ni があるとしている。前章で議論した「単数 (Singularive)」形の定義にしたがえば、マサイ語には「単数 (Singularive)」形とみられる形式が存在することになる。

(18) Ma	sg.	pl.	
Ol-AgUEt-An-I		Il-AgUEt-Ak	'carpenter' (A-gUEt 'to sharpen')
Ol-AIbArt-An-I		Il-AIbArt-Ak	'initiate'
ol-aibo-on-i		il-aibo-ok	'one who prevents'
ol-aimonk-on-I		il-aimonk-ok	'liar'

(18') Ma	sg.	pl.	
enk-ala-on-i		ink-ala-o	'ant' 10)
Ol-mEnEng'-An-I		Il-mEnEng'-A	'corpse' 10)

(18'') Ma	sg.	pl.	
Em-bArI-E		Im-bArI-Ak	

(18''') Ma	sg.	pl.	
Ol-kIIIkU-A-I		Il-kIIIkU	'message' 11)
e-modi-o-i		i-modi-ok	'cow dung'

(19) Ma	sg.	pl.	
Ol-AImUtIA-I		Il-AImUtIA	'reed' 12)

10) 複数の語末の位置に軟口蓋無声閉鎖音 k があつたと考える。

11) 複数形の語末の位置に語幹形成辞-Ak があつたと考える。複数形ではこの語幹形成辞は完全に脱落してしまった。また、単数形において母音間で k は脱落した。k > φ /A_I

12) 単数形と複数形からは、語幹形成の接尾辞-Ak が付加されているか明らかではない。

- (19 つづき) Ma sg. pl.
 Ol·AlA·I Il·AlA 'tooth, tusk'.
 Em·bAAE Im·gAA 'arrow, matter'13)
 O·lEE I·lEwA 'man, male'13)
 ol·kikue·i Il·kIkU 'thorn'14)
- (20) Ma sg. pl.
 Enk·AkEny·A Ink·AkEny 'morning'
 Ol·AkIr·A Il·AkIr 'star'
 Enk·Al·n·A Ink·Al·k 'hand'
 em·bolot·o im·bolot 'opening' (a·bol 'to open')
 ol·cang'it·o il·cang'it 'wild animal'
- (20') Ma sg. pl.
 Ol·kIn·A Il·kI 'breast, teat' 15)
- (20'') Ma sg. pl.
 en·kuku·o in·kuk 'charcoal' 16)
- (20''') Ma sg. pl.
 Ol·mAng'AtInt·A Il·mAng'AtI 'enemy' 17)
- (21) Ma sg. pl.
 En·kUng'·U In·kUng' 'knee'
- (22) Ma sg. pl.
 Ol·cAnI / Ol·cAtA Il·kEEk 'tree'
 En·kItEng' In·kishu 'cow, herd of cattle'

13) k が母音間で脱落した後、母音融合が生じた。k > φ / A_I, A + I > E

14) ol·kiku·ak·i·I > ol·kiku·a·i·i > ol·kiku·e·i

15) n > φ / _#

16) u > φ / _#

17) nt > φ / _#、Ol-、Il-、O-、I-、En-、In-、Em-、Im-は、「性」を表示する接頭辞。

(18)、(19)、(20)、(21)、(22)の例は、「大工」、「うそつき」、「男」、「敵」のように「人」の種類を表現する名詞であり、「蟻」、「ジャッカル」、「野生動物」、「牛」のように「動物」、「昆虫」を表現する名詞であり、「歯」、「腕」、「乳房」、「膝」のように「身体部位」の名称であり、また、「葦」、「牛のくそ」、「炭」、「木、薪」のように自然界において、普通、集団でかたまっているモノを表現する名詞である。これらは、1.2で議論した「単数 (Singularive)」形をもつ名詞の意味的特徴を備えている。

これらの例において、単数を表示する形式は、複数を表示する形式よりも形態論的に複雑になっている。(18)、(18')、(18'')、(18''')と(19)において、単数を表示する形式は、複数形に接尾辞-I/iが付加されて形成されている(語幹母音が[+ATR]であれば、語幹の母音に母音調和して、接尾辞の母音は、[+ATR]母音iになる)。(18)、(18')、(18'')、(18''')において、単数を表示する接尾辞-I/iのほか、単数を表示する形式と複数を表示する形式の両方に、接尾辞-Ak/okが付加されている(語幹母音が[+ATR]であれば、接尾辞-okが接辞され、語幹母音が[-ATR]母音であれば、接尾辞-Akが接辞される。母音調和において[-ATR]母音Aが母音調和をして[+ATR]になるとき、[+ATR]母音oになるのは、マサイ語では規則的である)。この接尾辞-Ak/okは、語幹形成の接尾辞である。

語幹に語幹形成の接尾辞-Ak/okが接辞されて、例えば、「木を削る」から「大工」がつくられるように、動詞から行為者名詞が派生するのは、マサイ語において生産的な名詞派生である。この語幹形成辞を構成する無声軟口蓋閉鎖音kは、母音AとI、oとiの間で歯茎鼻音nに変化する(18)。動詞語幹から名詞をつくる派生以外においても、母音間で無声軟口蓋閉鎖音kが歯茎鼻音nに変化する現象を観察できる(18')。母音間で無声軟口蓋閉鎖音kが歯茎鼻音nに変わる変化は、この音韻環境で、いつも、生じるわけではない。また、行為者名詞の派生以外の場合にも、この音韻変化を観察することができる(例えば、形容詞 *torrono* (sg.), *torrok* (pl.) 'bad', $k > n/o_o$)。

一方、無声軟口蓋閉鎖音kは、母音間で脱落することもある(18'')(18''')。無声軟口蓋閉鎖音kが母音間で脱落する現象は、母音が同一である場合、比較的、規則的に生じる音韻現象である(例えば、動詞 *lAk* 'to untie', *A-tA-lA-A* 'I untied it.' $k > \phi/A_A$)。母音がAとI、oとiの場合、分節的な音韻的条件としては、無声軟口蓋閉鎖音kが歯茎母音nに変化する条件と同じであるにもかかわらず、(18'')(18''')において無声軟口蓋閉鎖音kは、脱落する。無声軟口蓋閉鎖音kが鼻音化するか、脱落するかを決

定するのは、超分節的条件であろう。ここではそれについては議論しない。

(19)、(20)において単数を表示する形式は、それぞれ、複数形を表示する形式に接尾辞・I/i、あるいは、-A/o が付加されている（母音調和）。接尾辞・I/i が付加される形式には、(18)におけるように、語幹形成辞・Ak/ok を伴うものが存在するが、接尾辞・A/o が付加される形式は、普通、語幹形成辞・Ak/ok を伴わない。ただし、「手、腕」を意味する名詞は、語幹形成辞・Vk が付加されている可能性がある。

他の東ナイル諸語における「単数 (Singularive)」形の形成法は、ほぼ、マサイ語のそれと同様に考えられる。したがって、これまでの議論から、東ナイル祖語には「単数 (Singularive)」形が存在したと考えられる。その形成法には2つのやり方があった。1つは、接尾辞・I/i を、複数形を表示する形式に付加するやり方と、もう1つは、接尾辞・A/o を、複数形を表示する形式に付加するやり方である。接尾辞・I/i が付加される形式は、語幹形成辞・Ak/ok を伴うことが多かった。この語幹形成辞の機能や意味は明らかではない。さらに、どのような名詞が「単数 (Singularive)」形をつくるために、接尾辞・I/i を付加したのか、あるいは、接尾辞・A/o を付加したのかは、明らかではない。

(23) Proto·EN

(a) Stem·(Ak/ok)·I/i (k は、歯茎鼻音に変化したり、脱落したりする)

(b) Stem·A/o

(どの名詞が(a)の形成法を行うのか、どの名詞が(b)の形成法を行うのか明らかではない)

(23) の「単数 (Singularive)」形をつくる形成法で十分説明できない例が、まだ、存在する。(22) の例は、補充法による単数形と複数形の区別であると、従来、扱われてきたものである。これらについては、第3章で議論する。

2.3.南ナイル諸語、ナンディ語

Creider & Creider(1989)は、ナンディ語に単数をつくる接尾辞·i:n と「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞·(y)a:n が存在すると指摘している。接尾辞·i:n は、動詞語幹に接辞し、行為者名詞を派生する (ka:·sup·i:n 'follower' < ki:·sup 'to follow')。また、接尾辞·i:n は、民族名称を表す名詞に用いられる (na:nti·i:n 'Nandi man')。「単数 (Singularive)」接尾辞

-(y)a:n も接尾辞-i:n と同じように用いられることもある。ただし、接尾辞-(y)a:n が人間を表す名詞に用いられるとき、軽蔑的な意味を伴う (ce:m·na:nti-ya 'Nandi woman (pejorative)').

(24)	Na	sg.	pl.	
	mur	·ya:	mur	'rat'
	pay	·wa:	pay	'finger'
	pe:y	·ya:	pey	'water'

(24')	Na	sg.	pl.	
	pe:	ny	pany	'meat'
	ka:	lyɑ:ng'(LM)	ka:lyɑ:ng'(HF)	'fly' 18)
	ka:	nyi:t(LM)	ka:nyi:t(HF)	'worm'
	ke:	t(L)	ke:t(H)	'tree'
	koro:	r(MM)	koro:r(MH)	'hair on body'
	ku:	t(M)	ku:t(H)	'ant·bear'
	kuut	(HM)	ku:t(L)	'maggot'

(24'')	Na	sg.	pl.	
	kwe:	n·to	kwe:n	'firewood'
	pe:	r·to(ML)	pe:r(H)	'bank'
	po:	l·ta(ML)	po:l(H)	'cloud'

接尾辞-(y)a:n が接辞される名詞には、人間を表す名詞以外にも (24) の例がある (n は、語末の位置で脱落する)。これらは、「動物」、「身体名称」、「自然界で集合して存在するもの」であり、「単数 (Singulative)」形をもつ名詞の意味特徴を備えている。

(24')、(24'') において単数を表示する形式と複数を表示する形式は、たんに声調のみにより区別されている (-to と -ta は、thematic 接尾辞であり、数を表示する接尾辞ではない)。なんらかの分節的要素が単数を表示する形式か、複数を表示する形式に付加されていたと考えられるが、これについては明らかではない。

18) 括弧の H、M、L、F は、それぞれ、高声調、中声調、低声調、下降声調を表記する。

(25) Na	sg.	pl.
	po:k·i:n	po:k 'Bok'
	ce:p·isas:i:n	cep·isa:s 'fundamentalist' 19)
	ce:·poran·ya:	ce:·poran·i:n 'Borana woman'

接尾辞*-i:n* は、(25)における「ボラナ女性」のように複数を表示する形式においても接辞される。接尾辞*-i:n* は、複数をつくる接尾辞と同じ形をしており、したがって、接尾辞*-i:n*をもつ単数を表示する形式は、複数形の集合的用法であろう。

(26) Na	sg.	pl.
	tany (ss. te:i·ta)	tic (sp. tu:·ka) 'cow' 20)
	tye (ss. ce:p·ta)	ti:pin (sp. ti:p·i:k) 'girl'
	ci: (ss. ci:·ta)	pi:c (sp. pi:k) 'person'
	ki(y) (ss. ki-it)	tukun (sp. tuku:k) 'thing'

(26) は、補充法により単数を表示する形式と複数を表示する形式が区別されると考えられていたものである。これらについては、第3章で議論する。

南ナイル諸語の他の言語も、ほぼ、ナンディ語と同様の「単数 (Singularive)」形の形成法をもっている。南ナイル祖語の「単数 (Singularive)」形は、接尾辞·(y)a:n が複数を表示する形式に付加されてつくられる。接尾辞·i:n が付加されてつくられる形式は、「単数 (Singularive)」形であるか、あるいは、集合的用法で用いられる複数形であるかは明らかではない。

- (27) Proto·SN
 (a) Stem·(y)a:n
 (b) Stem·i:n (?)

19)ce:p-, ce:-は、「性」を表示する接頭辞である。

20)ss(secondary singular)形は、名詞が指示する指示物が特定で、単数のものである場合に用いられ、指示物が特定の複数である場合、sp(secondary plural)が用いられる。

3. ナイル祖語における「単数 (Singularive)」形

前章でナイル諸語は、「単数 (Singularive)」形をもっていることを証明した。また、西ナイル祖語、東ナイル祖語、南ナイル祖語において「単数 (Singularive)」形が存在し、それぞれにおける「単数 (Singularive)」形の形成法を再構成することを試みた ((17) (23) (27))。しかし、ここでの議論ではナイル祖語に「単数 (Singularive)」形が存在したことを証明するには十分ではない。また、ここでの議論からナイル祖語における「単数 (Singularive)」形の形成法を再構成することはできない。なぜなら、(17)、(23)、(27) で再構成した西ナイル祖語、東ナイル祖語、南ナイル祖語における「単数 (Singularive)」形の形成法から、ナイル祖語の「単数 (Singularive)」形の形成法に遡ることが容易ではないからである。また、これらの再構成した3つの形成法をつなぐ対応をいまだ提示していない。そこで、従来、補充法により単数を表示する形式と複数を表示する形式を区別すると考えられてきた形式について考察することによって、ナイル祖語の「単数 (Singularive)」形の再構成が可能になることを明らかにする。従来、補充法による単数と複数の区別と考えられてきたものが、再構成した「単数 (Singularive)」形の形成法をつないでくれるのである。

(28) 'cow, cattle'

EN: sg./pl.	SN: sg./pl.	WN: sg./pl.
Kuk KI-tEng' / kI-sUk	PK *tany / *tUc	Nu yang' / ghok
Mo tEng' / sUk	Na tany / tuc	Di weng' / ghOk
Ba kI-tEng' / ki-suk	Ko tany / tIc	Sh dhyang' / dhok
Ne kI-tEng'	Ak tany / tU:ka	An dhIAng' / dhok
Paj kI-tEng' / kI-sUk	Baj danyi / dugwa	Pa dhuang' / dhok
Te A-kI-tEng' / A-kI-tUk	Ro ranyi / ragwa	Lu dhIAng' / dhok
Tu A-I-tE / ng'A-A-tUk	Bia denyi / ragwa	Ac dyAAng' / dyang'i
Lk A-xI-tEng' / a-xi-sung'		La dyAng' / dyang'gi
Lp hI-tEng' / xU-sUng'		
Lt E-dhEng' / e-sung'		
Sa ng'-kI-tEng' / ng'-ki-shu		
Ca ng'-kI-tEng' / ng'-ki-cu		
Ma eng'-kI-tEng' / ng'-ki-shu		

西ナイル諸語、東ナイル諸語、南ナイル諸語に属するすべての言語にお

いて、単数を表示する形式は、語幹末の位置に鼻音をもっており、一方、複数を表示する形式は、若干の例外を除けば、語幹末の位置に鼻音をもたないことに注目する。この事実は、西ナイル諸語において「単数 (Singularive)」形が形成されるとき、語幹末の位置において閉鎖子音が鼻音化されることを思い出させる。そこで、西ナイル祖語がもっていた「単数 (Singularive)」形の形成法とよく似た形成法が、ナイル祖語において既に存在したと考える。すなわち、(28)における単数を表示する形式は、ナイル祖語において存在した「単数 (Singularive)」形を保存していると考えられる。ただし、(28)における複数形は、ナイル祖語の複数形の形成法により形成された形式を保存している場合と、それぞれの言語で発達させた複数形成法により新たに作られた改新形になっている場合がある。それでは、前章で行った「単数 (Singularive)」形の形成法の議論にしたがって、ナイル祖語の「単数 (Singularive)」形の形成を再構成してみよう。

Singularive: PN *(kwI)·r2Eg·Ak·I > (kwI)·r2Eg·An·I (a) >
 (kwI)·r2Eg·nI (b) > (kwI)r2Eng'·n·I (c) > (kwI)·r2Eng'·I (d)
 > (kwI)·r2Eng' (e)

(a) $k > n / V_V$ 。接尾辞·Ak·Iを再構成せずに、接尾辞·nIを再構成することも可能であると考えられる。ただし、東ナイル諸語(マサイ語)の「単数 (Singularive)」形をつくる形成法にむすびつけるために、接尾辞·Akを再構成しておく。軟口蓋閉鎖音が母音間で歯茎鼻音に変化する現象は、マサイ語の形態音韻論的变化のなかに見られる。また、語幹形成辞·Akの母音は、後で議論する Vowel Breaking を説明するために必要となる。

(b) $V > \phi / _n (?)$ 。鼻音の同化規則(c)を導くために、無理に想定した規則である。この規則を想定するにはかなりの無理がある。Reh(1996)は、母音を残したまま、鼻音化を想定している。

(c) $C > N / _n$ 、西ナイル諸語に存在した語幹末の位置で子音が鼻音化する規則である。この鼻音化を引き起こすのは、後続する接尾辞の歯茎鼻音である。

(d) $n > \phi / N_$ 、歯茎鼻音 n は、先行する鼻音のあとで脱落する。この規則は、西ナイル諸語の「単数 (Singularive)」の形成法にみられる。Reh(1996)は、N-drop を考えず、同じ鼻音の連続と考えている。

(e) 語末の位置で母音 I が脱落する。この母音は、南ナイル諸語にも存在した。ダトーガ語では、単数を表示する形式は、この母音 I を保存しているし、また、南ナイル諸語で単数を表示する形式が語幹末の位置で硬口蓋鼻音 ny をもっているのは、ナイル祖語軟口蓋鼻音 ng' がこの母音 I の前で口蓋化をおこして硬口蓋鼻音 ny になったためであると

考える。

東ナイル諸語の「単数 (Singularive)」形は、ナイル祖語において再構成された「単数 (Singularive)」形、(kwI)·r2Eng'から直接、由来している。テソ語、トゥルカナ語、サンプル語、ジャムス語、マサイ語においては、東ナイル諸語で発達した「性」を表示する接頭辞が語頭の位置に見られる。

ナイル祖語再構成形の語幹初頭の位置にみられる要素、(kwI)は、どのような環境で現われるか、また、どんな機能をもっているか明らかではない。ナイル祖語再構成音*kwは、唇軟口蓋音である。東ナイル諸語では、この再構成音は、軟口蓋音 k で現われ (ロコヤ方言では x で、ロピット方言では h で現われ、ロトゥホ語では母音間で脱落している)、西ナイル諸語では半母音 w で現われる。西ナイル諸語において*kwIは、wI、あるいは、I で現われると考えられるが、実際は、語頭の位置で脱落する。

ナイル祖語再構成音*r2は、無声はじき音である。ナイル祖語再構成音*r2は、東ナイル諸語では無声歯茎閉鎖音 t で現われる (ロトゥホ語ではなぜか dh で現われている)。ナイル祖語再構成音*r2は、南方言では無声歯茎閉鎖音 t で現われ、西ナイル諸語では、たいていは、無声歯閉鎖音 th (母音間では有声歯閉鎖音 dh) で現われる。

南ナイル諸語の「単数 (Singularive)」形は、ナイル祖語再構成形の語末の母音が脱落する以前の形式、(kwI)·r2Eng'·I から由来する。なぜなら、母音 I の前で、軟口蓋鼻音 ng'は口蓋化された。

ナイル祖語で再構成された語頭の位置の要素、(kwI)が南ナイル諸語に存在したかどうかは、対応例からは、全く確認することができない。

ナイル祖語再構成音*r2は、南ナイル諸語では無声歯茎閉鎖音 t で現われる。ダトーガ語 (バジュータ方言、ビアンジータ方言) は、語頭の位置に有声歯茎閉鎖音 d が表記されているが、ダトーガ語の閉鎖音には有声と無声の音韻的対立は存在しないので、有声歯茎閉鎖音 d ではなく、無声歯茎閉鎖音 t で表記すべきである (ロッティゲンガ方言は r で対応している)。ナイル祖語で再構成された語幹母音 E は、南ナイル諸語で vowel breaking と vowel sandhi をへて、低母音 a に変化した。ビアンジータ方言の語幹母音 e は、vowel breaking と vowel sandhi をへて生じた低母音 a が後続する母音 i によって変化したものであろう。

Vowel Breaking

* (kwI)·r2Eg·Ak·I > (kwI)·r2IAg·Ak·I (f)

(f)母音 E は、後続する母音 A の前で IA に変化した。この vowel breaking は、現在、

話されているマサイ語の音韻規則のなかにも見出される (a-te-dia-a 'I cursed' < A-dEk 'to curse' k は母音間で脱落)。

Vowel Sandhi

* $(kwI)\cdot r2IAg\cdot Ak\cdot I > (kwI)\cdot r2Ag\cdot Ak\cdot I (g)$

(g)母音連続 IA は、前半分の要素が脱落して、母音 A に単純化した。

この vowel breaking は、ナイル祖語で再構成した「単数 (Singularive)」形を構成する接尾辞・Ak の母音 A が引き起こす原因となっているので、接尾辞・Ak の母音 A が脱落する以前に生じたと考えなければならない。

西ナイル諸語の「単数 (Singularive)」形は、ナイル祖語で再構成された「単数 (Singularive)」形、* $(kwI)\cdot r2Eng'$ から由来した。

ナイル祖語で再構成された語頭の要素、 (kwI) が西ナイル祖語において存在したことは、ナイル祖語再構成音*r2 に西ナイル諸語が有声歯閉鎖音 dh で対応することから確認することができる。ナイル祖語再構成音*r2 は、西ナイル諸語で母音間において有声歯閉鎖音 dh (ヌエル語とディンカ語を除く)、あるいは、ゼロ子音か、半母音 (ヌエル語とディンカ語)、または、口蓋垂音 gh (ヌエル語とディンカ語)で現われる。

西ナイル諸語においても vowel breaking が生じた。ほぼ、すべての言語が vowel breaking による 2 重母音を保持している。ディンカ語の語幹母音 e は、存在したと考えられる後続の母音 i の影響によると考えられる。

ナイル祖語の「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞を* $Ak\cdot I$ と再構成した。母音 A を再構成することで vowel breaking とそれに続いて生じた vowel sandhi を説明することができ、語幹母音の推移を説明することが可能になる。また、母音 I を再構成することで南ナイル諸語における軟口蓋鼻音 ng' の口蓋化を説明することができる。

ナイル諸語の「単数形 (Singularive)」形を説明した。それでは、複数形の再構成は可能であろうか。複数形の説明は、一様ではない。複数形は、3 つの形成法が存在したと考えられる。1 つは、「単数 (Singularive)」形が派生されるもととなった、基準形である。基準形がそのまま「一般数 (General Number)」と複数を表示するために用いられた。2 番目は、基準形に「単数 (Singularive)」形を形成するときに付加された語幹形成辞・Ak/ok が接辞された形式である (現在、話されているマサイ語は、このタイプの複数形を今でも用いる)。「単数 (Singularive)」形を形成する接尾辞-I/i や-A/o は、当然、接辞されない。3 番目は、基準形から複数形の形成法にしたがって、つくられた複数形である。ただし、母音の範疇

は、[-ATR]から[+ATR]に交替したと考えられる。ナイル祖語の時代には、数の区別には母音の範疇の交替が重要な役割を果たしていたと考えられる。

Plural (1): PN *(kwi)·r2eg > (kwi)·r2eh > (kwi)·r2eu (h) > (kwi)·r2u (g)

Plural (2): PN *(kwi)·r2eg-ok > (kwi)·r2eh-ok > (kwi)·r2eu-ok > (kwi)·r2u-k

Plural (3): PN *(kwi)·r2eg-ni > (kwi)·r2eng'ni

Or PN *(kwi)·r2eg-ni > (kwi)·r2eg-ng'i (h) > (kwi)·r2eu-ng'i > (kwi)·r2u-ng' (g) > (kwi)·r2u-ng'

(h)ナイル祖語有声閉鎖音は、歴史的に弱化して声門摩擦音をへて先行する母音と2重母音をつくった。

(g)vowel sandhi か。e + u > u

東ナイル諸語において、サンプル語とマサイ語とジャムス語（これらの言語は系統的に近いと考えられる）は、Plural(1)による複数形をもっている。Plural(1)は、「単数 (Singularive)」形が派生するもとになった基準形が複数形として用いられている。ナイル祖語再構成音*r2 は、母音 U/u の前で、sh や c や s であらわれている。ロトゥホ語（ロコヤ方言、ロピット方言を含む）は、Plural(3)による複数形をもっている。Plural(3)は、基準形から複数形成規則にしたがって、派生された複数形である。上記以外の東ナイル諸語は、Plural(2)の形成法による複数形をもつ。Plural(2)は、基準形に語幹形成辞が接辞された形式に由来する。

南ナイル諸語の複数形は、Plural(2)の形成法によってつくられた複数形に基づいていると考えられる。ただし、ナンディ語とコニイ語において、複数形が語幹末の位置に硬口蓋閉鎖音 c をもつことから、これらの言語において新たな複数形成の改新があったと考えられる。

ダトーガ語は、バジュータ方言がもともとの語幹母音を保持しているが、ロッティゲンガ方言とビアンジータ方言は、語幹母音の変化、u から a への変化が生じている。後続する母音に同化したものと考えられるが、詳細は明らかではない。

西ナイル諸語の複数形は、Plural(2)によってつくられた複数形に基づいていると考えられる。ただし、西ナイル諸語では複数形の形成法が新しく発達した。それによると、単数語幹が有声閉鎖音で終わっていれば、単数語幹の語幹末の位置にある有声閉鎖音を無声化することで複数語幹はつ

くられる。(28)の西ナイル諸語の複数形は、この西ナイル諸語で発達した複数形成法により形成されている可能性がある。しかし、(28)において、西ナイル諸語は、「単数 (Singulative)」形をもち、そして、「単数 (Singulative)」形は、語幹末の位置に鼻音をもっていることから、西ナイル諸語の複数形は、語幹末の位置にある有声閉鎖音を無声化するという新しく発達した複数形成規則によってつくられたものではないと、ここでは考えておく。なぜなら、新しく発達した複数形成規則を適用するときには、既に「単数 (Singulative)」語幹は末尾の位置に鼻音をもっていたであろう。

Plural: WN (kwi)·r2eg-ok > (kwi)·r2eh-ok (h) > (kwi)·r2e-ok > (kwi)·r2-ok (g)

(h)普通、西ナイル諸語では、ナイル祖語有声閉鎖音は、弱化しない。しかし、ここでは弱化を想定しなければ、語幹母音を説明することができない。

(g)vowel sandhi, e + o > o

アチョリ語とランゴ語は、複数形の語幹末の位置にも鼻音をもつ。これは、西ナイル諸語が新たに発達させた改新規則に従って、単数を表示する語幹から規則的に形成された複数形である。

(29) 'animal'

EN: sg./pl.	SN: sg./pl.	WN: sg./pl.
Km e-thang'	PK *tya:ny	Nu lei, leagh / leini
Te E-tyang'	Na tya:nta	Di leei / laai
Tu E-tIAng'-It	Po tya:ny	Sh lay / lai
Do tiang'	Ba diyeyda	An laay / laai
Lk Iclang'	Bia riyayda	Pa lay / layi
Lp cyang'		Lu le (sg.?)
Lt a-cyang'		Ac lee(L) / lee(HL)
Ma Ol-cAng'-ItO / Il-cAng'-It		La le(L) / le(F)
Ca l-cAng'-UtO / l-cAng'-It		
On shang'-it'-o / shang'-itin		
Ba kI-jAk-UtAt / kI-jAk-wA		

単数を表示する形式は、バリ語を除く東ナイル諸語とダトーガ語 (バジ

ユータ方言、ピアンジータ方言)を除く南ナイル諸語において、語幹末の位置に鼻音をもっている。しかし、西ナイル諸語は、単数を表示する形式の語幹末の位置において子音が鼻音ではない。この事実は、東ナイル諸語と南ナイル諸語は、単数を表示するために「単数 (Singularive)」形を用いたが、西ナイル諸語は、単数を表示するために「単数 (Singularive)」形を用いなかったことを示している。同じ「野生動物」を意味する名詞に、ナイル諸語すべてが単数を表示するために「単数 (Singularive)」形を用いたわけではないことがわかる。「単数 (Singularive)」形の語幹末の位置の鼻音は、東ナイル諸語が軟口蓋鼻音 ng'を、南ナイル諸語が硬口蓋鼻音 ny をもつことから、(28)と同様に、有声軟口蓋閉鎖音 g を、「単数 (Singularive)」形が形成されるもとなる標準形の語幹末の位置に、再構成することができる。

Singularive: PN *(kwI)-l2Eg-Ak-I > (kwI)-l2IAg-Ak-I (f) > (kwI)-l2IAg-An-I (a) > (kwI)-l2IAg-nI (b) > (kwI)-l2IAng'-nI (c) > (kwI)-l2IAng'-I (d) > (kwI)-l2IAng' (e)

ナイル語再構成音*12は、無声側面音である。バリ語では、なぜかナイル祖語*12に有声硬口蓋閉鎖音 j が対応している。バリ語以外の東ナイル諸語では、ナイル祖語*12に無声歯茎閉鎖音 t、あるいは、無声歯閉鎖音 th、あるいは、無声硬口蓋閉鎖音 c が対応している。硬口蓋音が現われるのは、vowel breaking によって生じた高母音が、先行する子音を口蓋化したためである。逆に、対応表における無声硬口蓋閉鎖音 c の存在は、vowel breaking が生じたことを証明する。また、(29)の対応表から、vowel sandhi は、想定する必要はないと考えられる。口蓋化された子音が先行するため、vowel sandhi は、生じなかったと考えられる。ナイル祖語再構成音*12に、南ナイル諸語は、無声歯茎閉鎖音 t で対応する(ピアンジータ方言は、はじき音 r で対応する)。西ナイル諸語では、母音間でナイル祖語再構成音*12に側面音 l が対応する。

東ナイル諸語の「単数 (Singularive)」形は、ナイル祖語に再構成された「単数 (Singularive)」形、(kwI)-l2IAng'から直接、由来する。ただし、語頭の位置の要素、(kwI)-は、バリ語だけがもっており、そのためにナイル祖語再構成音*12は、バリ語において有声硬口蓋閉鎖音で現われている。マサイ語、ジャムス語、オンガモ語において「単数 (Singularive)」形は、ナイル祖語に遡る「単数 (Singularive)」形に、さらに接尾辞-ItO/-ito が

付加されて、形成されている。つまり、ナイル祖語に遡る「単数 (Singularive)」形が標準形として再解釈された。再解釈があったことは、マサイ語、ジャムス語、オンガモ語で複数形が新たに発達した複数形成法にしたがって、ナイル祖語「単数 (Singularive)」形からつくられていることから分かる。また、バリ語は、「単数 (Singularive)」形をもっていない。

東ナイル諸語 (マサイ語、ジャムス語、オンガモ語) の複数形は、新しい改新を示している。マサイ語、ジャムス語、オンガモ語の話し手は、「単数 (Singularive)」形の形成法でつくられた形式を標準形と再解釈し、それを語幹と考え、新たに語幹形成辞、-It/-it を付加した。

Plural: Ma, Ca, On *(kwI)-l2IAng'-It > -cAng'-It

南ナイル諸語の「単数 (Singularive)」形は、ナイル祖語に再構成された「単数 (Singularive)」形、(kwI)-l2IAng'-I に由来する。軟口蓋鼻音 ng' は、高母音 I の前で口蓋化して、ny に変化した。ナンディ語の硬口蓋鼻音 ny は、後続する歯茎閉鎖音に同化して、歯茎鼻音 n に変化する (-ta は、thematic 接尾辞)。ダトーガ語においても、単数を表示するために「単数 (Singularive)」形を用いたと考える。硬口蓋鼻音が歯茎閉鎖音の前で弱化して、y に変化したと暫定的に考えておく。その根拠は、語幹母音が他の南ナイル諸語と同様に vowel breaking を行っていることである。Vowel breaking を引き起こした母音が存在するためには、「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞が接辞されたと考える必要がある。

Singularive: SN *(kwI)-l2IAng'-I > tya:ny (Po)

> *tya:ny-ta > tya:nta (Na)

> *riyany-ta > riyayta (Bia) ? (閉鎖音に有声と無声の音韻的対立はない)

西ナイル諸語は、単数を表示するために「単数 (Singularive)」形を用いない。西ナイル諸語の単数を表示する形式を説明するには、2つの可能性がある。1つは、単数を表示するのに単数形を用いる。もう1つは、単数を表示するために集合的用法の複数形を用いる。これらの説明のどちらが妥当であるかを決定するのは困難である。また、どの西ナイル諸語が前者か後者のどちらを用いているか決定できない。確かなことは、鼻音化をとまなう「単数 (Singularive)」形を用いないことである。しかし、単数

を表示する形式を暫定的に複数形の集合用法から由来すると想定すれば、ヌエル語とディンカ語の形式は説明できる。

Singular: WN *(kwI)·l2Eg·I > *lEE·I

西ナイル諸語の複数形は、上で説明した形式と全く同じ形をしているか（ルオ語、ランゴ語）、あるいは、上で説明した形式にさらに接尾辞を付加した形式をしているか（ヌエル語、シルク語、パリ語、アニューワ語）、どちらかである。とはいえ、これらの複数形を説明するのは困難である。

(30) 'person'

EN: sg./pl.	SN: sg./pl.	WN: sg./pl.
Km i·tung'anān / ngi·tung'a	PK *ci:	Nu raan / ran
Te E·tUAn / I·tUng'a	Na ci: / pi:k	Di raan / kOc
Tu I·tUAAn / ngI·tUng'A	Ba si:da	Sh dhano / ji
Do tUng'AAAnI		An dhAAAnO / jEy
On O·tUng'AnI		Pa dhanho / jou
Sa I·tUng'AnI		Lu dhAnO / ji
Ca l·tUng'AnI / l·tUng'AnA		Ac dano / joo
Ma l·tUng'AnI / Il·tUng'AnA(k)		La dano / jO
Ba ng'UtU'		

(30) の対応表において東ナイル諸語と西ナイル諸語の単数を表示する形式は、語幹末の位置に鼻音をもっている（バリ語では、音転換が行われた？）。東ナイル諸語と西ナイル諸語は、単数を表示するために「単数 (Singularive)」形を用い、南ナイル諸語は、「単数 (Singularive)」形を用いないと考える。

東ナイル諸語の単数を表示する形式は、ナイル祖語に再構成された「単数 (Singularive)」形から直接、由来する。東ナイル諸語無声歯茎閉鎖音 t に西ナイル諸語有声歯閉鎖音 dh が対応していることから（ヌエル語とディンカ語では r が対応している）、語幹初頭の位置にナイル祖語再構成音 *r2 を再構成する。また、西ナイル諸語が有声歯閉鎖音で対応することから、語頭の要素、(kwV) を想定しなくてはならない（ただし、母音の質は不明）。語幹末の位置の子音は、東ナイル諸語が軟口蓋鼻音 ng' をもつことを考慮して、有声軟口蓋閉鎖音 g を再構成する。ただし、西ナイル諸語が

語末の位置に軟口蓋鼻音 ng'ではなく、歯茎鼻音 n をもつことは、語幹末の位置での子音の鼻音化についての議論からすると、不規則な対応である。語幹母音は、後舌高母音*U を再構成した。テソ語とトゥルカナ語において単数を表示する形式に母音連続、UA が存在するが、UA に後続する鼻音が軟口蓋鼻音 ng'ではなく、歯茎鼻音 n であることから、テソ語とトゥルカナ語の単数を表示する形式は、*tUng'An と再構成する。母音間で軟口蓋鼻音が脱落した結果、tUAn となり、母音連続、UA が生じたのである。したがって、母音連続 UA は、母音 O が vowel breaking によって、UA になったものではない。つまり、(30) においては、(28) と (29) で議論した vowel breaking は生じなかった。また、「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞は、(28) と (29) では・Ak-I と考えたが、(30) では西ナイル諸語の対応例を考慮して、・Ak-O と想定する。「単数 (Singularive)」形を形成する接尾辞に・I/i と・O/o の2つを想定することになる。

Singularive: PN *(kwV)-r2Ug-Ak-O > (kwV)-r2Ug-An-O (a) > (kwV)-r2Ug-nO (b) > (kwV)-r2Ung'-nO (c) > (kwV)-r2Ung'-O (d) > (kwV)-r2Ung' (e)

東ナイル諸語の話し手は、ナイル祖語で再構成された「単数 (Singularive)」形を基準形として再解釈した。この基準形に東ナイル諸語で新たに発達した語幹形成辞、・Ak と「単数 (Singularive)」接尾辞-I (-An-I <・Ak-I) を付加することで単数を表示する形式をつくった。複数を表示する形式は、この基準形に・Ak が付加されることでつくられる (k は語末の位置で、ときどき、脱落した)。

Singularive: EN (kwV)-r2Ung'-Ak-I
Plural: EN (kwV)-r2Ung'-A(k)

西ナイル諸語の単数を表示する形式は、東ナイル諸語のように簡単には説明することはできない。語幹母音 A を説明するために、これらの形式が、ナイル祖語再構成形、(kwV)-r2Ug-An-O から由来すると考える。有声軟口蓋閉鎖音 g は、声門摩擦音 h に弱化して、さらに、脱落したと考える。有声軟口蓋閉鎖音の脱落により生じた母音連続は、vowel sandhi をおこした。

西ナイル諸語の複数形を説明するのはさらに困難である。西ナイル諸語

の複数形は、ナイル祖語に再構成した語幹、*(kwV)·r2Ug から複数形成規則にしたがって、つくられたと考える。ただし、複数形をつくる接尾辞-iを伴うものと、接尾辞を伴わないものがあったようである。有声軟口蓋閉鎖音 g は、弱化して脱落した。有声硬口蓋閉鎖音 j は、ナイル祖語再構成音*r2 の母音間での反映であろう。

Singulative: WN *(kwV)·r2Ug·An·O > (kwV)·r2Uh·An·O > (kwV)·r2U·An·O > (kwV)·r2·An·O (g)

Plural: WN *(kwV)·r2Ug / *(kwV)·r2ug·i > jO / ji

南ナイル諸語の単数を表示する形式は、ナイル祖語に遡る形式であるかどうか明らかではない。もちろんこれらの形式は、「単数 (Singulative)」形に由来しないから、これをナイル祖語に遡るとすれば、西ナイル諸語の複数形と比較するのがよいであろう。西ナイル諸語の複数形、ji の形式について、上で説明を試みた。この説明を使って南ナイル諸語の単数を表示する形式を考察する。

Singular: SN *(kwV)·r2ug·i > ci:

南ナイル諸語において、ナイル祖語で再構成された有声閉鎖音は、常に弱化する。ナイル祖語再構成音*r2 に南ナイル諸語は、無声硬口蓋閉鎖音 c が対応する (ダトーガ語は、摩擦音 s が対応している)。ナイル祖語再構成音*r2 の出現に (28) と (30) で違いがあるのは、環境の違いによると考えられる。

南ナイル諸語における単数を表示する形式は、上の説明から形態論的には複数形である。なぜなら、複数をつくる接尾辞-i が接辞されている。したがって、単数を表示するために、南ナイル諸語は、複数形の集合的用法を用いていると考えられる。

ナンディ語の複数を表示する形式は、単数形と全く異なる語幹からなり、その起源は明らかではない。

(31) 'breast'

EN: sg./pl.

Km kiDina

SN: sg./pl.

PK *kItIn

WN: sg./pl.

Nu thin, thien / thiin,

Te E·kIsIna	Na kI:nE:t / kinai:k	thinni
Tu e·sIkIna	Po kItIn	Di thiin / thin
Kak kInat.a	Gis giding'ga	Sh thinno / thinn
Kuk kInEt	Bi giring'ga	An thunho / thunh
Mo kInEtI		Lu thuno
Ba kInat		
Na kInat		
Ne kInEt		
Lk o·ghine		
Lp hI.nai / hI		
Lt Ena / a·xI		
On O·kI.na / O·kII		
Sa I·kI.na / I·kI		
Ca I·kI.na / I·kI		
Ma Ol·kI.na / Il·kI		

東ナイル諸語、南ナイル諸語、西ナイル諸語において、単数を表示する形式は、すべて、語幹末の位置に鼻音をもっている。ダトーガ語（ギサミジェンガ方言、ビアンジータ方言）は、軟口蓋鼻音 ng'をもっているが、それは歯茎鼻音 n が後続する軟口蓋閉鎖音に同化した結果と考えられる。西ナイル諸語のなかで、アニューワ語は、語幹末の位置に歯鼻音 nh をもっているが、これは、先行する子音、無声歯閉鎖音 th に同化した結果であり、語幹末の位置の鼻音は、本来、歯茎鼻音 n であった。したがって、すべての形式は、歯茎鼻音 n を語幹末の位置にもっていたことになる。東ナイル諸語のなかで、カリモジョン語とテソ語、トゥルカナ語（音転換をしている）は、それぞれ、2音節からなる語幹、kiDin·、kIsIn·をもっている（D は、歯茎内破音）。これら3言語以外の東ナイル諸語は、たいてい、1音節からなる語幹をもっている（たとえば、マサイ語、ジャムス語、サンプル語は、kI.n·をもっている）。また、この1音節からなる語幹は、長い母音をもっている。この事実は、語幹内部においてなにか分節素が脱落した結果、語幹が長い母音をもつことになったことを示している。このことを考慮すれば、東ナイル諸語の語幹は、本来、2音節からなっており、それは、*kItIn のような音の連続からなっていたと考えられる。

東ナイル諸語 t、南ナイル諸語 t、西ナイル諸語 th の対応には、ナイル祖語再構成音 *r₂ を再構成する。西ナイル諸語は、ナイル祖語再構成音 *r₂

に語頭の位置においては無声歯閉鎖音 th で対応するからである（アチョリ語は、歯閉鎖音系列をもたない）。したがって、東ナイル諸語と南ナイル諸語は、語頭の要素、(kwI)・をもっているが、西ナイル諸語は、語頭の要素、(kwI)・をもっていなかったと考える必要がある 21)。ともあれ、ナイル諸語に属する言語は、すべて、単数を表示するため、「単数 (Singularive)」形を用いていた。

Singularive: PN *(kwI)·r2Id·Ak·O > (kwI)·r2Id·An·O (a) > (kwI)·r2Id·n·O (b) > (kwI)·r2In·n·O (c) > (kwI)·r2In·O (d) > (kwI)·r2In (e)

東ナイル諸語の「単数 (Singularive)」形は、ナイル祖語で再構成された形式、*(kwI)·r2In から直接、導くことができる。この語幹は、テソ語、トゥルカナ語、カリモジョン語以外の言語において、r2 が脱落したため、*kwIIn となった。東ナイル諸語の複数形は、「単数 (Singularive)」形のもとになったナイル祖語に再構成された基準形、(kwI)·r2Id から、恐らく、由来すると考えられる。東ナイル諸語においてナイル祖語に再構成された有声閉鎖音は、普通、弱化して、声門摩擦音 h をへて、母音の要素になる。

Plural: EN *kwI·r2Id > kwI·r2Ih > kwI·Ih > kwI·I (On, Sa, Ma, Ca)

南ナイル諸語の「単数 (Singularive)」形は、ナイル祖語で再構成された「単数 (Singularive)」形、*kwI·r2In に直接、由来する。ナンディ語においては、東ナイル諸語と同様に、分節素の脱落により語幹母音が長母音をもっている。

ナンディ語の複数形は、この「単数 (Singularive)」形に由来する語幹を標準形と再解釈し、それに複数の接尾辞が付加されて、つくられている。

西ナイル諸語の「単数 (Singularive)」形は、ナイル祖語で再構成された形式、*r2In に由来する。ただし、シルク語は、語幹末の位置に鼻音の連続をもつが、この鼻音の連続がナイル祖語における「単数 (Singularive)」形の形成途中にあらわれる鼻音の連続を反映しているかは明らかではない。また、アニュワ語、ルオ語、アチョリ語の語幹母音が後舌高母音で対応しているのは説明できない。西ナイル諸語の複数形は、「単数 (Singularive)」形が話し手によって標準形と再解釈され、その標

21) ナイル祖語、語幹初頭に位置での閉鎖音の無声と有声の対立の問題は未解決である。

準形から複数形成の規則にしたがってつくられた。

(32) 'egg'

EN: sg./pl.	SN:	WN: sg./pl.
Kak katIIO		Nu tuOng', tong'u / tong'
Kuk kasIIUk.UtI / katIIOk		Di tuong' / to.ng'
Mo kotoluk.uti / katalok		Sh tong'o / tong'
Ba katuluk.uti / katalok		An tOng'O / tOng'
Ne kotuluk.uti / katIIOk		Pa tong'o / tong'
Paj kotiluk.uti / katIIUk		Lu tOng' / tOng'gE
Do / xattEl·		Ac tong'
Lk / a·ghatEl·		
Lt / attEl·		

南ナイル諸語において、東ナイル諸語や西ナイル諸語の形式と同じ起源をもつと思われる形式を見つけることはできない。西ナイル諸語において、単数を表示する形式は、語末の位置に鼻音をもつ。西ナイル諸語において、「単数 (Singularive)」形を見つけることができる。東ナイル諸語は、語頭の要素、(kwV)-をもっているが、西ナイル諸語は、語頭の要素をもたない。なぜなら、語幹初頭の位置において、西ナイル諸語の無声歯茎閉鎖音 t は、東ナイル諸語の無声歯茎閉鎖音 t と対応している。もし、西ナイル諸語に語頭の要素、(kwV)-が存在すれば、西ナイル諸語の有声歯茎閉鎖音 d が東ナイル諸語の無声歯茎閉鎖音 t に対応するはずである。したがって、西ナイル諸語は、語頭の要素、(kwV)-をもたなかったと考えるべきである。語幹母音は、後舌高母音 u を再構成する。なぜなら、ヌエル語とディンカ語で vowel breaking が観察できる (u > uo)。語幹末の位置における子音は、ナイル祖語有声側面音、*l1 を再構成する。ナイル祖語有声側面音 *l1 は、東ナイル諸語において側面音 l で、西ナイル諸語において、ときどき、有声軟口蓋閉鎖音 g であらわれる。(32) において、西ナイル諸語の語幹末の位置にある軟口蓋鼻音 ng' は、「単数 (Singularive)」形の形成の過程で生じる語幹末子音の鼻音化によって、ナイル祖語再構成音 *l1 が鼻音化を受けた結果である。

Singularive: PN *(kwV)·tul1-ok-I > (kwV)·tuol1-ok-i (f) > (kwV)·tuol1-on-i (a) > (kwV)·tuol1-n-i (b) > (kwV)·tuong'-n-i (c) >

(kwV)-tuong'·i (d) > (kwV)-tuong' (e)

東ナイル諸語において、鼻音を伴う「単数 (Singularive)」形を見つけることができない。バリ語 (カクワ方言、クク方言、モンダリ方言、ニエプ方言、パジュル方言を含む) の複数形は、「単数 (Singularive)」がつけられるもとになった語幹に、新たに接尾辞が付加されてつくられた。バリ語の単数を表示する形式は、語幹形成辞-ok が付加された複数形に、新しい接尾辞が付加されて形成された。そのとき、鼻音化は生じなかったと考えられる。

西ナイル諸語の単数を表示する形式は、ナイル祖語において再構成された「単数 (Singularive)」形、*tuong' に、直接、由来する。ただし、語頭要素、(kwV)-をもたない。

西ナイル諸語の複数形は、「単数 (Singularive)」形を基準形と再解釈することで、その標準形から複数形の形成法にしたがって、規則的につくられた。

(33) 'fire'

EN: sg./pl.	SN: sg./pl.	WN: sg./pl.
Kak kI·mang'	Na ma:t / ma·stinwa	Nu mac, mai / mai
Kuk kI·mang'	Po ma?(?:glottal stop)	Di mac / mEc
Mo sI·ma		Sh mac
Ba kI·mang'		Pa mac / majo
Km a·ki·m		An maaj / mAj
Te a·kI·m		Lu mac / mec, meye
Tu a·ki·m		La mac / mace
Do xI·ma		Ac maac
Lk a·xi·mang'		
Lp kI·ma		
On na·kI·ma		
Sa ng'·kI·ma		
Ca n·kI·ma / n·kI·ma·cIn		
Ma Eng'·kI·ma / Ing'·ki·maitie		

東ナイル諸語のなかでバリ語 (モンダリ方言を除く) とロトゥホ語 (ロコヤ方言) だけが語幹末の位置に鼻音をもっている。バリ語とロトゥホ語

以外の東ナイル諸語の多くは、語末の位置の子音を脱落させたので（母音も同時に失った言語もある）、語幹末の位置に鼻音が存在したかどうか明確ではない。しかし、東ナイル諸語のなかで系統的に近い関係をもたないバリ語とロトゥホ語が語幹末の位置の鼻音を保持していることは、東ナイル諸語全体が恐らく鼻音化を伴う「単数 (Singularive)」形をもっていたと考えてよい。南ナイル諸語と西ナイル諸語は、鼻音化を伴う「単数 (Singularive)」形をもたなかった。語幹末の子音の再構成音は、東ナイル諸語が軟口蓋鼻音をもつことから、ナイル祖語有声軟口蓋閉鎖音 *g を再構成する。

Singularive: PN *(kwI)·mAg·Ak·I > (kwI)·mAg·An·I (a) >
 (kwI)·mAg·n·I (b) > (kwI)·mAng'·n·I (c) > (kwI)·mAng'·I (d) >
 (kwI)·mAng' (e)

東ナイル諸語の「単数 (Singularive)」形は、ナイル祖語の「単数 (Singularive)」形、*(kwI)·mAng' に由来する。

東ナイル諸語の複数を表示する形式は、ナイル祖語において再構成された語幹、*(kwI)·mAg に新たな接尾辞が付加されて形成された。ナイル祖語において再構成された有声閉鎖音は、普通、東ナイル諸語では弱化し、声門摩擦音 h をへて、母音の一部になる。マサイ語の複数形における語幹母音、ai は、ナイル祖語再構成音 *g が弱化して生じた 2 重母音である。

南ナイル諸語の単数を表示する形式は、ナイル祖語で再構成された語幹、*(kwI)·mag に由来する。ナンディ語の単数語幹が長母音をもつのは、ナイル祖語再構成音 *g が弱化して、母音の一部になった結果である。ポコト語においては、ナイル祖語再構成音 *g は、声門閉鎖音? として保存されている。南ナイル諸語の複数形は、ナイル祖語において再構成された語幹、*(kwI)·mAg に新たな接尾辞が付加されてつくられた。

西ナイル諸語の単数を表示する形式は、ナイル祖語において再構成された語幹、*(kwI)·mAg に、高母音 I が後続していると考えられる。ナイル祖語再構成音 *g は、高母音 I の前で口蓋化して硬口蓋閉鎖音 j に変化している(ルオ語で硬口蓋閉鎖音 j は、母音間において半母音 y で発音される)。この高母音は、「単数 (Singularive)」形をつくる形成法の過程であらわれる接尾辞に由来するか、あるいは、複数形をつくる時に接辞される接尾辞に由来するか、明らかではない。しかし、鼻音化が存在しないことから、この高母音は、複数形をつくる接尾辞に由来すると考えておく。そう

であれば、西ナイル諸語の単数を表示する形式は、本来、複数形であって、話し手は、単数を表示するために複数形を集合的に用いたと考えられる。

(34) 'dog'

EN: sg./pl.	SN: sg./pl.	WN: sg./pl.
Kak Dyong'	PK *ng'o:k	Nu juk
Kuk Diong'	Na ng'okto / ng'o:k	Di joo / jook
Mo Diong'	Ki ng'o:kta	Sh gwok / guok
Ba Diong'	Ak ng'o:yta	An guok / guu
Sa l-DIa	Ba gude:da	Pa gwok / guu
Ca l-DIa / l-dein	Bia gure:ra	Lu guok / guogi
Ma ol-Dia / il-diein		Ac gwOk / gwOgi
		La gwok / gwoggi

東ナイル諸語のなかでバリ語（すべての方言を含む）だけが単数を表示する形式の語幹末の位置に鼻音をもっている。バリ語だけが「単数 (Singularive)」形の存在を示している。恐らく、南ナイル諸語は、東ナイル諸語や西ナイル諸語と起源を同じにする「犬」を意味する語をもたない。

バリ語が単数を表示する形式の語幹末の位置に軟口蓋鼻音 ng' をもち、西ナイル諸語の単数を表示する形式が語幹末の位置に軟口蓋閉鎖音をもっていることから、ナイル祖語に再構成する「単数 (Singularive)」形のもとになる語幹は、語幹末の位置に有声軟口蓋閉鎖音 *g をもっていたと考える。語幹母音は、明らかではないが、暫定的に後舌中母音 *O、あるいは、*o を再構成しておく。語幹初頭の位置において東ナイル諸語の内破音 D は、西ナイル諸語の有声軟口蓋閉鎖音 g と対応している。この対応に対して、ナイル祖語に有声側面音 *l1 を再構成する。ナイル祖語再構成音 *l1 は、西ナイル諸語では側面音 l か、ときどき、有声軟口蓋閉鎖音 g で現われ(ディンカ語とヌエル語では後続する高母音によって、口蓋化している)、東ナイル諸語では側面音 l か、ときどき、歯茎内破音 D、あるいは、歯茎外破音 d で現われる。

Singularive: PN *l1Og-Ak-I > l1IAg-Ak-I (f) > l1IAg-An-I (a) > l1IAg-n-I (b) > l1IAng'-n-I (c) > l1IAng'-I (d) > l1IAng' (e)

Singularive: PN: *l1og-ok-i > l1uog-ok-I (f) > l1uog-on-I (a) > l1uog-n-I (b)

> l1uong'·n·I (c) > l1uong'·I (d) > l1uong' (e)

東ナイル諸語の「単数 (Singulative)」形は、ナイル祖語に再構成された「単数 (Singulative)」形に由来する。バリ語以外の東ナイル諸語は、単数を表示する形式の語幹末の位置に鼻音が存在したかどうか明らかではない。しかし、これらの言語においてもバリ語と同様に語幹母音が vowel breaking を起こしている。これは、これらの言語にもバリ語と同様の接尾辞が、現在は失われているが、過去に接辞していたことを示している。東ナイル諸語の複数形は、ナイル祖語再構成形、*l1O/og に由来する。ナイル祖語に再構成された有声閉鎖音は、東ナイル諸語において、普通、弱化し、声門摩擦音 h を経て、母音の一部になる。

西ナイル諸語は、鼻音化を伴う「単数 (Singulative)」形をもたなかった。単数を表示する形式は、ナイル祖語において再構成された語幹、*l1o/Og から直接、由来する。有声閉鎖音は、西ナイル諸語において、普通、語末の位置で無声化される。語末の位置で有声閉鎖音が無声化した形式を、西ナイル諸語の話し手は標準形と再解釈し、その標準形から規則的に複数形をつくっている。

(35) 'seed, sesame'

EN: sg.	SN:	WN: sg./pl.
Kuk nyumuti		Di nyuOm / nyum
Ba nyumuti, ko·nyum		Sh nya / nywole
Ne nyumuti		An nyimmo / nyimi
Km e·ki·nyomit		Ac nyim
Te e·ki·nyomit, i·ka·nyum		La nyim
Tu e·ki·nyamIt		
Do xi·nyom·o.ti		
Lt a·nyimiti		

南ナイル諸語に、東ナイル諸語、西ナイル諸語と同じ起源をもつと考えられる形式を見つけることはできない。また、西ナイル諸語の中でシルク語だけが単数を表示する形式に語幹末の位置に鼻音をもたない。シルク語の形式が他のナイル諸語の形式と同じ起源をもつとすれば、シルク語以外の東、西ナイル諸語の形式は、「単数 (Singulative)」形をつくる形成法によって生じた鼻音をもつと考えられる。ただし、シルク語の形式のみで、

この結論を下すのは困難であろう。しかし、「単数 (Singularive)」形をもっていたと仮定すると、以下のような派生が考えられる。

Singularive: PN *(kwi)-nyob-ok-i > (kwi)-nyob-on-i (a) > (kwi)-nyob-n-i
(b) > (kwi)-nyom-n-i (c) > (kwi)-nyom-i (d) > (kwi)-nyom (e)

(36) 'tree'

EN: sg./pl.	SN. sg./pl.	WN: sg./pl.
Do sani	PK *kE:t	Nu jath / jEn
Lk o-yandIk / o-yan.I	Na ke:tit / ke:t	Di wAl / wal
Lp yyanI	Po kE:t	Sh yath / yEnh
Lt a-yyani	Ba ge:ta	Pa yath / yin
On O-shEtA / o-k'eye		An jaath / jEnnhI
Sa l-cani		Lu yath / yIEn
Ca l-cani / l-keek		Ac yAt / yadi, yen
Ma Ol-cAnI / Il-kEEk		
Ol-cAtA		
Ba kadEn		

バリ語を除く東ナイル諸語は、単数を表示する形式の語幹末の位置に鼻音をもっている。南ナイル諸語と西ナイル諸語は、単数を表示する形式の語幹末の位置に鼻音をもたない。東ナイル諸語だけが「単数 (Singularive)」形を、単数を表示するために用いた。語幹末の位置において、東ナイル諸語が歯茎鼻音 n をもつこと、また、西ナイル諸語が歯閉鎖音 th をもつことから、ナイル祖語で語幹末の子音は有声のはじき音 *r1 であったと考える 22)。語幹初頭の位置の子音は、唇軟口蓋閉鎖音 *kw であった。唇軟口蓋閉鎖音は、東ナイル諸語と南ナイル諸語では無声軟口蓋閉鎖音 k で現われ、西ナイル諸語では半母音 w、あるいは、y で現れる。語幹の母音は、前舌中母音 E を再構成する。前舌中母音 E は、後続する

22) 有声はじき音のかわりに有声歯閉鎖音を再構成する可能性もある。ただし、ナイル祖語に歯閉鎖音、th、dh を再構成するかは、未解決である。また、ディンカ語が側面音 l で対応していることから、ナイル祖語に有声側面音 *l1 を再構成する可能性もある。しかし、側面音をもつのはディンカ語のみであることから、ディンカ語において、有声はじき音から有声側面音へのなんらかな音韻変化があったと考えるのがよいであろう。

音節が低母音 A をもつとき、vowel breaking を起こし、母音連続 IA になる。この vowel breaking で生じた高母音 I は、東ナイル諸語において先行する無声軟口蓋閉鎖音 k を口蓋化し、無声硬口蓋閉鎖音 c、あるいは、硬口蓋摩擦音 sh にした。そして口蓋化によって生じた無声硬口蓋閉鎖音 c のあとで、高母音 I は脱落した（オンガモ語、サンプル語、ジャムス語、マサイ語）。

ジャムス語、マサイ語の複数形は、ナイル祖語で再構成された「単数 (Singularive)」形が形成されるもとなった語幹、*kwEr1 に接尾辞-Ak が接辞された形式から由来する。ナイル祖語有声閉鎖音は、普通、東ナイル諸語において弱化して、声門摩擦音 h を経て、2 重母音や長母音の一部になった。有声はじき音*r1 も同様の弱化をおこなった。オンガモ語においては語末の位置の無声軟口蓋閉鎖音 k は脱落したのであろう。また、東ナイル諸語において 3 拍の長さの母音は、許容されない。したがって、EEA という連続は、EE に短くなった。

Plural: EN *kwEr1-Ak > kwEh-Ak > kwEE-Ak > kwEE-(k)

南ナイル諸語は、単数を表示するために鼻音化を伴う「単数 (Singularive)」形を用いない。しかし、南ナイル諸語の単数を表示する形式は、ナンディ語の単数形と複数形をみればわかるように、複数形より形態論的に複雑な形式になっている。南ナイル諸語の形式、kE:t は、複数形であると仮定すると、単数を表示する形式は、複数形に接尾辞-it を付加されて形成されている。南ナイル諸語の複数形は、ナイル祖語で再構成された語幹、*kwEr1 になんらかの接尾辞-t(V)が接辞されて形成された。普通、ナイル祖語有声閉鎖音は、南ナイル諸語において弱化して、2 重母音や長母音の一部になった。南ナイル諸語の単数を表示する形式がもつ長い母音は、ナイル祖語再構成音*r1 が存在したことを示している。

西ナイル諸語は、単数を表示するために鼻音化を伴う「単数 (Singularive)」形を用いない。単数形は、ナイル祖語で再構成された語幹、*kwEr1 で説明することができる。ナイル祖語再構成音*kw は、西ナイル諸語において半母音 w であられる。しかし、西ナイル諸語においても、vowel breaking が起こった (E > IA)。その結果、生じた高母音 I の影響により、ナイル祖語再構成音*kw は、半母音 y であられる。口蓋化の原因となった高母音 I は、vowel sandhi により、失われた。ナイル祖語再構成音*r1 は、普通、西ナイル諸語において歯茎有声閉鎖音 dh で現

われる。しかし、西ナイル諸語では語末の位置で有声閉鎖音は、しばしば、無声化された。一方、西ナイル諸語の複数形は、たいてい、語幹末の位置に鼻音をもっている。この鼻音は、複数形が「N・複数」と呼ぶ複数形成法にしたがってつくられたことを示している（第2章、(10)を参照）。

Plural: WN (PN *kwIAr1 > *yAdh) *yAdh-nI > yAnh-nI > yAnh-I or yA-nI

(37) 'water'

EN: sg./pl.	SN: sg./pl.	WN: sg./pl.
Kak pio	Na pe:k / pay-wa:	Nu pi (pl. only)
Ku piong'	Pa pix	Di pi (pl. only)
Ba piong'-tot / piong'	Da ba:w	Sh pi, piu, pik (pl.) (pigan 'this water')
Ne piong'		An pii (pl.)
Mo ci-pi		Pa pii (pl.)
Km ng'a-ki-pi?		Lu pi / pige
Te a-ki-pi		La pi
Tu ng'a-ki-pi		Ac pii
Lp na-Φiong'		
On na-shi-βi		
Do ki-fyong'		

東ナイル諸語において、バリ語（クク方言、ニエプ方言をふくむ）とロトゥホ語（ロピット方言、ドンゴトノ方言）が単数を表示する形式の語幹末の位置に鼻音をもっている。南ナイル諸語と西ナイル諸語は、単数を表示する形式の語幹末の位置に鼻音をもたない。南ナイル諸語と西ナイル諸語は、鼻音化を伴う「単数 (Singularive)」形を、単数を表示するために用いなかった。語幹母音は、とりあえず、前舌中母音 e を再構成し、vowel breaking (e > io) があつたと考えておく。語幹末の位置の子音は、東ナイル諸語が軟口蓋鼻音 ng' をもつことと、若干の西ナイル諸語において語幹末の位置に軟口蓋閉鎖音が見つかることから、有声軟口蓋閉鎖音 g を再構成する。

Singularive: PN *(kwi)-peg-ok-i > (kwi)-piog-ok-i (f) > (kwi)-piog-on-i (a) > (kwi)-piog-n-i (b) > (kwi)-piong'-n-i (c) > (kwi)-piong'-i (d) >

(kwi)-piong' (e)

東ナイル諸語の「単数 (Singularive)」形は、ナイル祖語に再構成された「単数 (Singularive)」形、*(kwi)-piong'に由来する。東ナイル諸語(バリ語)の単数を表示する形式は、「単数 (Singularive)」形の形成法にしたがってつくられた形式に、さらに、接尾辞が付加されている。カリモジョン語、テソ語、トゥルカナ語における、語幹末の位置に鼻音をもたない形式は、「単数 (Singularive)」形から鼻音が脱落した結果、生じた形式であろう。

南ナイル諸語の複数を表示する形式は、ナイル祖語に再構成された「単数 (Singularive)」形が形成されるもとになった語幹、*(kwi)-peg に直接、由来する。ナイル祖語で有声閉鎖音 *g は、普通、南ナイル諸語において弱化して、2重母音や長母音の一部になった。ナンディ語の単数を表示する形式は、本来の語幹、*(kwi)-peg になんらかの接尾辞・(V)k が接辞されている。これは語幹母音が長いことから分かる。

西ナイル諸語では、「水」を意味する名詞は、普通、常に複数で扱われる。しかし、単数を表示する形式を全くもたないわけではない。単数で使われる場合、それは「水溜り」を意味する。西ナイル諸語の複数、あるいは、単数を表示する形式は、ナイル祖語で再構成された語幹、*peg に由来する。語頭の要素(kwi)・を、西ナイル諸語はもたなかった。もし、語頭の要素(kwi)・をもっていれば、語幹初頭の位置の子音は、有声両唇閉鎖音 b で対応しなければならない。語幹末の位置においてシルク語の複数形変種やルオ語の複数形に軟口蓋閉鎖音 k や g をもつ形式を見つけることができる。これらの形式は、ナイル祖語に再構成された語幹、*peg にまで遡ることができる。

(38) 'skin'

EN: sg./pl.	SN:	WN: sg./pl.
Lp yyon		Sh lao / lani
On na-shoni		Lu law / leeni, lepe, lewni
Sa l'coni		Ac laa
Ca l'coni		La lao / leni
Ma ol'coni / il-conito		

南ナイル諸語において、東ナイル諸語や西ナイル諸語と起源を同じくす

る形式を見つけることはできない。東ナイル諸語は、単数を表示する形式の語幹末の位置に鼻音をもっている。西ナイル諸語は、単数を表示する形式の語幹末の位置に鼻音をもっていない。したがって、東ナイル諸語だけが「単数 (Singularive)」形をもっていたと考える。

語幹初頭の位置にナイル祖語無声側面音**l2*を再構成する。ナイル祖語無声側面音**l2*は、ときどき、東ナイル諸語において無声歯茎閉鎖音 *t* で現われる。西ナイル諸語において側面音 *l* で現われるのは、普通、母音間である。この対応を説明するためには、ナイル祖語に語頭の要素、(**kwV*)-を再構成する必要がある。しかし、この語頭の要素が存在したことの証拠はどこにも見つからない。東ナイル諸語において無声歯茎閉鎖音 *t* は、後続する高母音のまえで口蓋化を起こした (*t > c / _u*)。この口蓋化を説明するためには、語幹母音が *vowel breaking* をおこなったと想定しなければならない (*o > uo*)。

語幹末の位置に東ナイル諸語が歯茎鼻音 *n* をもっているのも、また、西ナイル諸語が長母音や半母音で語幹が終わっているのも、ナイル祖語有声歯茎閉鎖音**d*を語幹末の位置に再構成する。

Singularive: PN *(*kwi*)-*l2od*·*ok*·*i* > (*kwi*)-*l2uod*·*ok*·*i* (*ʃ*) > (*kwi*)-*l2uod*·*on*·*i* (*a*) > (*kwi*)-*l2uod*·*n*·*i* (*b*) > (*kwi*)-*l2uon*·*n*·*i* (*c*) > (*kwi*)-*l2uon*·*i* (*d*) > (*kwi*)-*l2uon* (*e*)

無声歯茎閉鎖音が口蓋化した後、*vowel sandhi*により母音連続 *uo* は、単純な母音 *o* に変化した。東ナイル諸語の単数を表示する形式は、ナイル祖語で再構成された「単数 (Singularive)」形、*(*kwi*)-*l2uon*·*i*で説明することができる。東ナイル諸語 (マサイ語) の複数形は、「単数 (Singularive)」形が標準形と再解釈されて、この標準形に接尾辞が付加されてつくられた。

西ナイル諸語の単数を表示する形式は、ナイル祖語で再構成された「単数 (Singularive)」形が形成されるもとなった語幹、*(*kwi*)-*l2od*に由来する。ただし、語幹母音は、東ナイル諸語とは異なる *vowel breaking* をおこなったと考える (*o > ua*)。ナイル祖語有声歯茎閉鎖音**d*は、ときどき、西ナイル諸語において弱化し、2重母音や長母音の一部になる。西ナイル諸語の複数形は、「N・複数」と呼ぶ複数形成法にしたがっている(第2章、(10)を参照)。ただし、ルオ語の複数変種、*lepe* は、*law*を標準形と再解釈し、その標準形に規則的な複数形成法を適用してつくられた新しい

改新形である。「皮」を意味する名詞の再構成を試みたが、しかし、その再構成にはかなりの困難が伴う。

(39) 'sand'

EN: sg./pl.	SN: sg./pl.	WN: sg./pl.
Km a·rthinyon	Na ng'any·ek / ng'a·ny·a:	Nu lIEt
Te a·sing'e	Gis sige:da	Di liEEt / lit
Tu a·sinyon.i		Sh kwojo
Lp sing'ata		An akuuo / akui
Lt a·sing'It		Lu kuoyo
Sa sUnyaI		Ac kweyo
Ca sUnyai		
Ma O·sInyAI / I·sInyA		

東ナイル諸語だけが、単数を表示する形式の語幹末の位置に鼻音をもっている。ナンディ語の形式は、東ナイル諸語や西ナイル諸語の形式と同じ起源をもつ形式であると判断することは困難である。語幹の初頭の位置にナイル祖語再構成音**l2*を想定する。現在、話されているナイル諸語の子音体系が摩擦音をもつことは珍しい。たとえ摩擦音が存在しても、他の言語からの借用であったりする。(39)の対応例で見られる摩擦音は、ナイル祖語再構成音**l2*に由来すると考える。ナイル祖語再構成音**l2*は、東ナイル諸語では、ときどき、無声歯茎閉鎖音 *t* で現われる。また、カリモジョン語では、無声歯閉鎖音 *th* で現われる ((29)を参照)。ナイル祖語再構成音**l2*は、西ナイル諸語ではときどき側面音 *l* で、また、ときどき、無声軟口蓋閉鎖音 *k* で現われる。語幹末の位置において、東ナイル諸語は軟口蓋鼻音 *ng'*か硬口蓋鼻音 *ny*をもっている。軟口蓋鼻音 *ng'*が高母音の前で口蓋化して、硬口蓋鼻音 *ny*になったと考える。したがって、「単数 (Singularive)」形が形成されるもととなった語幹の末尾の位置に、有声軟口蓋閉鎖音 *g*を再構成する。

Singularive: PN **l2ig-ok-i* > *l2ig-on-i* (a) > *l2ig-n-i* (b) > *l2ing'-n-i* (c) > *l2ing'-i* (d) > *l2ing'* (e)

東ナイル諸語の単数を表示する形式は、ナイル祖語に再構成された「単数 (Singularive)」形に由来する。東ナイル諸語 (マサイ語) の複数形は、

「単数 (Singularive)」形が標準形として再解釈され、その標準形に接尾辞が付加されてつくられた。

南ナイル諸語においてダトーガ語 (ギサミジェンガ方言) は、ナイル祖語に再構成された「単数 (Singularive)」形が形成されるもとなった語幹、*lzig から由来する単数形をつくる。ただし、語幹末の位置の子音は、ナイル祖語再構成音*g に遡れるか疑問である。

西ナイル諸語の単数を表示する形式は、ナイル祖語に再構成された「単数 (Singularive)」形が形成されるもとなった語幹、*lzig から由来する。ナイル祖語再構成音*l2 は、西ナイル諸語において、ときどき、側面音 l で、また、無声軟口蓋閉鎖音 k であらわれる。ナイル祖語再構成音*g は、西ナイル諸語では、ときどき、弱化して、2重母音や長母音の一部になる。このことから、ヌエル語とディンカ語は、語幹末の位置の子音の対応に問題が残る。

(40) 'arm, hand'

EN: sg./pl.	SN: sg./pl.	WN: sg./pl.
Kuk koni.n	Na e-u:t / e-u:n	Di ciin / cin
Mo koyin	Po e:x	Sh cino / cing'
Ba koni.n / konisi	Gis gE:dinda	Pa cing', cino / cinin
Km a-kan	Bia gE:rita	An cEnO / cEng'
Te a-kan		Lu cIng'
Tu a-kan		Ac cing'
Do xa.nI		
Lk a-ghEna.ng'		
Lp xa.na		
Lt a-anI		
On na-hE.na / na-hEk		
Sa ng'-kaI.na		
Ca ng'-kaI.na / ng'-kalk		
Na Eng'-kaI.na / Ing'-kAIk		

西ナイル諸語だけが単数を表示する形式の語幹末の位置に鼻音をもっている。東ナイル諸語において、例えば、マサイ語の形態分析をおこなうと、単数を表示する形式は、接頭辞 Eng'-、語幹·ka-、接尾辞·Ik、接尾辞·A と分析できる (接尾辞·Ik の無声軟口蓋閉鎖音 k は、母音間で歯茎鼻音

n に変化する)。バリ語（クク方言を含む）にみられる 2 番目の音節の鼻音は、何らかの子音が後続する鼻音に同化して鼻音に変化したと考える。したがって、バリ語（モンダリ方言）に見られる 2 番目の音節が半母音で始まっている形式が、本来の形であったろう。カリモジョン語やテソ語に見られる単数形の語末の位置にある鼻音は、マサイ語に見られる接尾辞の一部である無声軟口蓋閉鎖音 k が母音間で鼻音化したなごりである。したがって、語幹末の位置に鼻音は存在しない。

南ナイル諸語においてダトーガ語（ギサミジェンガ方言、ビアンジータ方言）は、無声軟口蓋閉鎖音 k で語幹が始まるが、ナンディ語とポコト語は語幹初頭の子音を失っている（ダトーガ語には閉鎖音に有声と無声の音韻的対立はなく、したがって、初頭の子音は、無声閉鎖音で表記されるべきである）。西ナイル諸語は、語頭の位置に無声硬口蓋閉鎖音 c をもっている。無声軟口蓋閉鎖音 k が口蓋化をしたと考えるが、口蓋化を引き起こした高母音 i がどこから生じたのか説明が困難である。とりあえず、語幹母音に前舌中母音 E を再構成し、vowel breaking と vowel sandhi を想定しておく。西ナイル諸語が語幹末の位置に硬口蓋鼻音 ng' をもつことから、「単数 (Singularive)」形がつくられるもとなった語幹は、末尾の位置に有声硬口蓋閉鎖音 g をもっていたと考える。

Singularive: PN *kEg·Ik·A > kIAg·Ik·A (?) > kIg·Ik·A (?) > kIg·In·A (a) > kIg·n·A (b) > kIng'·n·A (c) > kIng'·A (d) > kIng' (e)

東ナイル諸語の単数を表示する形式は、ナイル祖語で再構成された「単数 (Singularive)」形が形成されるもとなった語幹、*kEg に由来する。ナイル祖語再構成音 *g は、普通、東ナイル諸語において弱化して、2 重母音や長母音の一部になる。マサイ語の単数を表示する形式は、ナイル祖語再構成形 *kEg に由来する語幹 kA (母音の変化は不明) に、マサイ語の接尾辞·Ik·A が接辞されてつくられたと考える。マサイ語の複数形は、「単数 (Singularive)」形をつくる接尾辞·A がとれた形式となっている。

南ナイル諸語の単数を表示する形式は、ナイル祖語で再構成された「単数 (Singularive)」形が形成されるもとなった語幹 *kEg に由来する。ナイル祖語再構成音 *g は、普通、南ナイル諸語では弱化して、2 重母音や長母音の一部になる。

西ナイル諸語の単数を表示する形式は、ナイル祖語で再構成された「単数 (Singularive)」形に由来する。ただし、語幹末の鼻音が軟口蓋鼻音 ng'

で現われるのが規則的な対応であるが、ときどき、語幹末の位置に歯茎鼻音 *n* をもつ言語がある。これは、鼻音が連続するとき、普通は後続する鼻音が脱落するのだが、ときどき、先行する鼻音が後続する鼻音に調音点を同化した言語があったと考える（たとえば、*ng'+n > ng'* にたいして、*ng'+n > n+n > n*）。複数形は、「単数 (Singularive)」形が標準形に再解釈されて、その標準形から複数形成規則にしたがってつくられた。

(41) 'thing'

EN: sg./pl.	SN: sg./p.	WN: sg./pl.
On na-t'oshi / na-tosh'ini	Na kI:ta / tukun	Di kedang' / kaang'
Ca n-toki / n-toki-tin	Po kIx	Sh gin /gik
Ma en-toki / in-tokitin	Da gid	An gin / gii
		Lu gi(n) / gik
		Ac gin
		La gIn / gigu

西ナイル諸語だけが、単数を表示する形式の語幹末の位置に鼻音をもっている。語頭の要素は、東ナイル諸語とナンディ語の複数形の対応から *to-* と考えられる。語幹末の子音は、西ナイル諸語の複数形語幹が軟口蓋閉鎖音 *g*、あるいは、*k* で終わっていることから、ナイル祖語に有声軟口蓋閉鎖音 *g* を再構成する。(40) では、西ナイル諸語の語幹末の位置で軟口蓋鼻音 *ng'* と歯茎鼻音 *n* が混在していた。(41) では、すべての言語が歯茎鼻音 *n* をもつが、本来は、軟口蓋鼻音 *ng'* であったと考える。軟口蓋鼻音 *ng'* は、「単数 (Singularive)」形の形成の過程で、後続する歯茎鼻音 *n* に同化したと考える。語幹初頭の位置の子音は、ナイル祖語再構成音 **k* を再構成する。ナイル祖語再構成音 **k* は、西ナイル諸語において母音間では有声閉鎖音 *g* で現われる。

Singularive: PN **(to)·kig-ik·o > (to)·kig-in·o (a) > (to)·kig·n·o (b) > (to)·king'·n·o (c) > (to)·king'·o (d) > (to)·king' (e)*

Singularive: WN **(to)·king'·n·o > (to)·kin·n·o > (to)·kin·o*

東ナイル諸語と南ナイル諸語の単数を表示する形式は、ナイル祖語で再構成された「単数 (Singularive)」形が形成されるもとになった語幹、

**(to)·kig* に由来する。ナイル祖語再構成音 **g* は、弱化して、2重母音や長母音の一部になった。

西ナイル諸語の単数を表示する形式は、ナイル祖語「単数 (Singularive)」形、**(to)·king'* に由来する。複数形は、「単数 (Singularive)」形が形成されるもになった語幹、**(to)·kig* に由来する。語頭の要素は脱落したが、それが存在したことは、語幹初頭の位置で閉鎖子音が有声化したことから分かる。語末の位置で有声軟口蓋閉鎖音 **g* は、無声化をうける。

(42) 'spirit, ghost'

EN: sg.	SN: sg.	WN: sg./pl.
Do mEnIang'a	Na oindet	Sh jwok / juok
Lt a·mInIang'a		An jUOk / juu
On O·mEnEng'a·nI		Pa jwok
Sa l·mEnang'a·I		Lu jUOk, jwOk / juogi
Ca l·mEnEng'a·ni		Ac jOOk / jogi
Ma Ol·mEnEng'a·ni		La jOk / jogi

東ナイル諸語と南ナイル諸語は、単数を表示する形式の語幹末の位置に鼻音をもっている。南ナイル諸語における歯茎鼻音 *n* は、後続する子音に同化した結果であって、本来は、軟口蓋鼻音 *ng'* であつたろう。西ナイル諸語は、語幹末の位置に軟口蓋閉鎖音をもっている。初頭の要素は、*mE* である。語幹初頭の位置において東ナイル諸語は、歯茎鼻音 *n* をもっている。東ナイル諸語において側面音 *l* は、後続する鼻音に同化して鼻音化される (西ナイル諸語ルオ語 *ling'* 'to hear' に、東ナイル諸語マサイ語 *a·ning'* 'to hear' が対応する)。したがって、語幹初頭にナイル祖語再構成音 **l1* を再構成する。ナイル祖語再構成音 **l1* は、西ナイル諸語で、ときどき、有声軟口蓋閉鎖音 **g* で現われる。有声軟口蓋閉鎖音 *g* は、*vowel breaking* で生じた高母音の前で口蓋化され、有声硬口蓋閉鎖音 *j* となる。語幹母音は、東ナイル諸語の形式を説明するためには、前舌中母音 *E* を、西ナイル諸語の形式を説明するためには、後舌中母音 *O* を再構成しなければならない。この語幹母音の再構成の問題は、未解決である。

Singularive: PN **(mE)·l1E/og·A/og·A/o* > *(mE)·l1IA/uog·A/og·A/o* (f) >
(mE)·l1IAuog·A/on·A/o (a) > *(mE)·l1IA/uog·n·A/o* (b) >

(mE)-l1IA/uong'-n-A/o (c) > (mE)-l1IA/uong'-A/o (d) > (mE)-l1IA/uong' (e)

Singulative: EN *(mE)-l1IAng' > (mE)-nIAng' (鼻音同化)

東ナイル諸語における単数を表示する形式は、ナイル祖語で再構成された「単数 (Singulative)」形、*(mE)-l1IAng' に由来する。

西ナイル諸語における単数を表示する形式は、ナイル祖語で再構成された「単数 (Singulative)」形が形成されるもとなった語幹、*(mE)-l1log に由来する。ナイル祖語再構成音 *g は、西ナイル諸語において有声軟口蓋閉鎖音 g で現われるが、語末の位置で無声化を受けて無声軟口蓋閉鎖音 k になる。西ナイル諸語の中の多くの言語において、複数形は、基準形と再解釈された単数形から複数形成法にしたがって規則的につくられる。

4. まとめ

第3章で、ナイル祖語の形態論の一部を再構成する試みをおこなった。ナイル祖語には「単数 (Singulative)」形が存在したことを証明した。また、ナイル祖語に「単数 (Singulative)」形が存在したが、東、南、西ナイル諸語、すべての言語が、同じ起源の名詞の単数を表示するために、常に、「単数 (Singulative)」形を用いるわけではなかった。例えば、「牛」を意味する名詞の場合、ナイル諸語のすべての言語は、「単数 (Singulative)」形を用いたが、「人」を意味する名詞の場合、東ナイル諸語と西ナイル諸語は、「単数 (Singulative)」形を用いたが、南ナイル諸語は、「単数 (Singulative)」形を用いなかった。従来、試みられたナイル祖語の再構成は、形態論の再構成を考慮せず、ただよく似た音の対応を探した結果、なんら正しい結論を得ることはできなかったのである。Vowel Breaking、vowel sandhi、vowel breaking に伴う子音の口蓋化など、まだ、十分な検討を要する問題が残っているが、本論で試みた形態論の再構成をもとにした通時的研究がナイル祖語の再構成を可能にする。

参考文献

- Barrett, A. 1988. *English-Turkana Dictionary*. Nairobi: MacMillan.
Crazzolara, J.P. 1938. *A Study of the Acoli Language*. London: Oxford University Press.
Creider, J.T. & C.A.Creider. 1989. *A Grammar of Nandi*. Hamburg: Buske.

2001. *A Dictionary of the Nandi Language*. Koln: Rudiger Koppe.
- Dimmendaal, G.J. 1983. *The Turkana Language*. Dordrecht: Foris.
- Ehret, C. 2001. *A Historical-Comparative Reconstruction of Nilo-Saharan*. Koln: Rudiger Koppe.
- Hieda, O. 1991. 'Plural formation of nouns in Western Nilotic,' in M.L.Bender (ed.) *Nilo-Saharan Vol. 7*. pp.147-164. Hamburg: Helmut Buske.
2000. 'Some problems in Datoog (Bajuuta dialect) consonantal system,' in R.Vossen, A. Mietzner, und A.Meissner (eds.) *Mehr als nur Worte..., Afrikanistische Beitrage zum 65. Geburtstag von Franz Rottland*. pp.285-293, Koln: Rudiger Koppe.
- Knappert, J. & J. Ukoko, 1964. *Essai de dictionnaire Dho Alur*. Ghent: Brill.
- Kohnen, B. 1933. *Shilluk Grammar*. Verona: Missioni Africane.
- Muratori, C. 1948. *English-Bari-Lotuxo-Acoli Vocabulary*. Okaru: Catholic Mission Printing Press.
- Nebel, A. 1948. *Dinka Dictionary*. Wau: Verona Fathers.
- Noonan, M. 1992. *A Grammar of Lango*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Reh, M. 1996. *Anywa Language. Description and Internal Reconstructions*. Koln: Rudiger Koppe.
1999. *Anywa-English and English-Anywa Dictionary*. Koln: Rudiger Koppe.
- Rottland, F. 1982. *Die sudnilotischen Sprachen: Beschreibung, Vergleichung, und Rekonstruktion*. Berlin: Dietlich Reimer.
- Simeoni, A. 1978. *Pari, A Luo Language of Southern Sudan*. Bologna: E.M.I.
- Tucker, A.N. 1994. *A Grammar of Kenya Luo (Dholuo)*. Koln: Rudiger Koppe.
- Tucker, A.N. & J.Tole-Mpaayei. 1955. *A Masai Grammar with Vocabulary*. London: Longmans, Green.
- Vossen, R. 1982. *The Eastern Nilotes: Linguistic and historical Reconstruction*. Berlin: Dietlich Reimer.
- Westermann, D. 1912. 'The Nuer Language,' *Mitteilungen des Seminars fur Orientalischen Sprachen 15*, pp.84-141.

On Singulative in Nilotic

Osamu Hieda

Abstract

All three branches of the Nilotic languages have the singulative formation in the nominal morphology.

The singulative formation in Proto-West Nilotic can be reconstructed as follows; singulative forms were derived from basic stems by attaching the suffix, -O or -nO. The alveolar nasal of the latter nasalized the preceding consonant in basic stems.

(a) CVC-O

(b) CVC-nO > CVN-nO > CVN-O

The singulative forms in Eastern Nilotic are derived from basic stems by attaching the suffix, -A/o or -(Ak/ok)-i. The velar voiceless stop turned to an alveolar nasal inter-vocally.

(c) Stem-A/o

(d) Stem-(Ak/ok)-I/i > Stem-(An/on)-I/I

The singulative forms in Southern Nilotic are derived from basic stems by attaching the suffix, -(y)a:n or -i:n. The forms accompanied by the suffix, -i:n, were most likely plural forms with collective meaning.

(e) Stem-(y)a:n

(f) Stem-i:n

We can find some cognate sets that attest the singulative formation in Proto-Nilotic. For example;

Teso (E N) 'cow, cattle' Nandi (S N) 'cow, cattle' Shilluk (W N) 'cow, cattle'
A-ki-tEng' (sg.) / A-ki-tUk tany (sg.) / tuc (pl.) dhyang' (sg.) / dhok (pl.)
Singulative: PN *(kwI)-r2Eg-Ak-I > (kwI)-r2Eg-An-I > (kwI)-r2Eg-n-I > (kwI)-
r2Eng'-n-I > (kwI)-r2Eng'-I > (kwI)-r2Eng'

Three branches retain singulative forms in the cognate set for 'cow, cattle'. However they do not always retain singulative forms. Some branches have singulative forms, but others do not in a cognate set.

(受理日 2003 年 9 月 8 日 最終原稿受理日 2003 年 12 月 16 日)